

# 埴生の篝火



宗倉 徹

## セヲの水場

---

その日の朝も、セヲは水を汲むため南の谷津へと歩いていました。

その谷津には、セヲの家族が住む小屋のある低い丘のあちらこちらから滲み出した水が、一か所に集まってできた水たまりがあり、セヲの毎日はこの水たまりの水を汲んで小屋に運ぶことから始まるのでした。

セヲは鬱蒼とした林をなだらかに、時おり急な勢いで下る小道を歩きながら朝の土の匂いを嗅ぐのが好きでした。とりわけいま頃のように、爽やかな風の中に湿り気が増してくる季節が好きでした。

テッペンカケタカ

テッペンカケタカ

ホトトギスが呼び合うなか、裸足の裏のひんやりとした肌触りを楽しみながらセヲが水たまりのそばまで下りてきた時、羊歯の高く茂る坂の中からガサガサッという音とともに顔を出したのがありました。それは、白くて短い毛並みの犬でした。その犬は羊歯の茂みから出ると、うれしそうに尻尾をまわし、セヲのふくらはぎのあたりに濡れた鼻を押し付け、自分の主人（あるじ）の匂いをしっかりと確かめています。

「やあ、アユキ。家を出るとき誘おうと思ったのに、いなかったじゃないか。先に来て遊んでたのかい？ それとも慌てて追いかけてきたのかい？」

セヲはアユキのあごの下に手を回し、喉のあたりを抱きかかえるようにして撫でてやりました。

しばらくのあいだ、うれしそうにセヲの手にあごを乗せていたアユキでしたが、急にピクッと耳を立て、自分の脚でしっかりと立ち直すと、水たまりのある方をじっと見つめています。セヲの水たまりは、道の先を覆うように生えた実葛（さねかずら）の茂みの向こうです。セヲもアユキが見つめる先に目を凝らすと、彼と両親のほかは誰も知らないはずの水たまりから、何者かの気配が漂ってきます。セヲは、いまにも走り出しそうなアユキの喉を抱えるように撫でながら、そっと茂みの陰からのぞき見ました。

するとそこには、黒くつややかに光る毛並みの犬を連れた若者がひとり、水辺の縁（へり）に置かれた小さな岩の上に腰をおろしています。よく見ると、左の足を水の中にひたしているようでした。その足先をひとしきりさすった後、若者はそれまでおとなしく主人（あるじ）の傍らに座っていた、彼の忠実な僕（しもべ）に声をかけ、水を飲むように促しました。しばらくの間、静かに水を飲んでいた黒い犬は、やにわにそのピンと立った耳をクルッとこちらに向けました。セヲのアユキがゆらした羊歯のこすれるかすかな音をとらえたのでしょうか。全身の注意をセヲたちのいる茂みに集めています。それに応えるようにアユキがセヲの手を離れて走りだしたので、セヲも慌てて茂みから飛びだし、アユキを追いかけてきました。

不意に現われた白い犬と猿のような顔をした少年に、見知らぬ若者は少し驚いた様子を見せながらも、まるで自分を訪ねてきた年下の友を迎えるような物腰で語りかけました。

「兎を追っているうちに陽が落ちてしまい、寝ぐらになりそうな所を探していたらもう夜明けだ。見なれぬ場所だが、ここはどこかな？」

その声は、自分よりもほんの少しだけしか年上に見えない若者の姿にしては思いのほか低く、そして少しかすれたようにも聞こえましたが、決してセヲを見下したり、あるいはおどかしたりしているようには感じられませんでした。ただ、その整った目鼻立ちと大人びた話し振りのためか、セヲにはこの若者が少しだけ図々しく映りました。

セヲは、アユキが若者の黒い犬とけんかをはじめるとはしないか気が気ではない、といった素振りで、彼の問いかけにすぐには答えませんでした。それでも若者は別にいらだつふうでもなく、再びセヲに問いかけました。

「ここはいったいどこだい？」

主人のかたわらにぴたりと寄り添いこちらをうかがう黒い犬の周りをクンクンと嗅ぎまわり、やがてうれしそうに尻尾をクルクル回しはじめたアユキの様子に、セヲもようやく若者の方に顔を向けると答えました。

「ここは僕の水場だ。」

「そうか。」

若者は答えました。

「それは悪かったな。夜通しさまよっているうちに足を怪我してしまったので、そうとは知らずにこの泉で傷を洗ってしまった。マカミの飲み水も少し分けてもらった。おまえの水場と知っていれば穢すことはなかったんだが。」

「気にすることはないさ。少し待てばまた澄んでくる。それに、この水で煮炊きをするわけじゃあないしね。」

セヲの言葉に若者は眉をわずかに動かすと、

「この水は飲めないのか？」

そう言いながら、小さく咳払いをしました。

それは、実は彼の犬だけではなく自分も飲んだ水をのどの奥から吐き出そうとしたのか、あるいは

は毒水を飲んだのではという恐れに声が少しうわずってしてしまったことをごまかそうとしたの  
かもしれません。セヲはその両方だと思いました。

ずっと大人のように落ち着きはらっていた若者が、はじめて見せた慌てた様子にセヲは少しほ  
っとしました。

「別に飲めないわけじゃないよ。ちょっと渋い感じがするけどね。そうだったろう？」

セヲは若者の黒い犬に向かって話しかけました。犬は、鼻先でちょっかいを出しつつづけている  
アユキをどうにかしてくれ、とでもいうような顔つきでセヲを見つめています。

「ほら、青蛙も遊んでいる。」

水辺にかがみ込んだセヲは、うれしそうに小さな緑色の蛙の背中を指先でつついて見せました  
。

「もしかしたら怪我にはかえって良いかもしれないよ、僕は試したことはないけど。」

「いい加減なことを言って、俺をからかっているのか。」

「とんでもない。ここの水は土をこねて焼くのもってこいなんだ。」

「土を？」

「そう。この水でこねた土はしっかりと粘って、形を作りやすいのさ。そして、焼き上げた土の  
堅いことといたら」

「俺の足は」

少しいらだってセヲの言葉をさえぎった若者は、俺の足は土で出来ているわけじゃない、そう  
言いかけてやめました。目の前の少年の顔はからかっているようではなく、自分の水の素晴らし  
さに夢中になっているだけだったからです。

「そんな水なんだから、怪我にだって悪いわけがない。」

「なるほど。でも、あまり美味くはなかった。」

若者は笑みを含んだ声で答えました。

「おまえは土師部（はせべ）の者か。この辺は土師部の郷（さと）の近くなのか。」

「この辺に郷はない。僕と父さん、母さんの三人だけだ。」

「そうか、それは困ったな。土師部の郷の近くであれば、俺の郷への道も分かるのだから。」

「土師部の郷への道なら教えてあげるよ。」

セヲがそう言ったとき、若者のおなかが「ぐう」と鳴りました。セヲは気が付かないふりをしよ

うとしましたが、アユキだけでなくマカミまでがその音のした方にぴくりと耳を向けたので、若者はばつが悪そうにマカミの頭を擦るように撫でました。

「僕の家へ寄って行くといいさ。大したものはないけど、腹を空かせたまま長い道を歩くとろくなことはないからね。」

「ありがとう。助かる。」

セヲの誘いに、若者は素直に礼を言いました。

「僕はセヲ。そして、こいつはアユキ。」

「俺の名はマヨサ。この犬は」

「マカミだね。雄かい？ それとも雌かい？」

「雄だ。」

「そうか、珍しいな。アユキも雄なんだけど、ずいぶん気が合っているみたいだ。」

セヲは嬉しそうに二頭の犬がにおいを嗅ぎ合っているのを眺めながら言いました。

「家に行く前に、まず水汲みにつきあってくれ。」

「それはいいが、水を汲む甕（かめ）はどこにある？ おまえは持って来ていないようだが。」

マヨサは不思議そうに辺りを見回しました。

「甕ならこっちにある。」

そう言うとセヲは、先ほど隠れて様子をうかがった実葛の茂みの辺りまで戻って行きました。アユキも慌てて後を追います。マカミは「どうしましょうか」というような顔でマヨサを見上げます。マヨサはマカミの首の後ろをポンと叩くと、セヲたちの後に続きました。セヲは実葛の茂みの陰から左の方に延びる細い道に入って行きました。

「どのくらいの甕なんだ？」

「ひと抱え半くらいはあるかな。」

「そんな甕に汲んだ水、いつもおまえ一人で運んでいるのか？」

「ああ、そうさ。」

「おまえの家はこの丘の上なんだろう？」

「ああ、そうさ。」

セヲの身体はがっしりとしているとはいえ、水を満たした土の甕を一人で運びあげるほどの力があるようには見えません。セヲに比べて上背のある身体のマヨサにとっても、大変な仕事であ

ることははっきりしています。

「昨日も上まで運んだのか？」

「もちろん。毎日だよ。」

「なら、なぜ甕が下にある？」

「それは、ほら。」

セヲが誇らしげにさし示した先を見たマヨサは、一瞬わが目を疑いました。

細い道の先、そこだけ羊歯の藪が刈り払われて小さな舞台のようになった場所に、セヲの水甕は置かれていました。しかし、マヨサを驚かせたのは甕の大きさではありませんでした。

「これは・・・おまえが作ったのか。」

「ああ、そうさ。」

セヲは心の底から嬉しそうに答えました。

「本当に、おまえ一人で？」

「父さんにも助けてもらったはもらったさ。でも、おおかたのところは僕が考えて、僕が作った。」

誇らしげなセヲの言葉に、マヨサは改めての驚きとともに空を見上げました。

水甕が置かれた場所のすぐ脇から、急な坂に沿って細身の丸太が二本、ひと跨ぎほどの間をあけて立てかけられています。いえ、立てかけられているのではなく、羊歯や草がきれいに刈り取られた坂にふた筋の浅い溝が掘られ、そこに丸太が半分埋め込まれているのです。そして、丘の頂きに届くまで何本もの丸太が継ぎ足されています。丸太の根元には、アケビの蔦で編まれた四角い籠が二本の丸太をまたぐように載せられ、そのなかに大きな水甕が納められています。

「水を入れたら、上から蔦を引っ張り上げるんだ。」

そう言いながらセヲは、大きな水甕のそばに置かれた水汲み用の小さな甕を拾いあげました。

「さっきの水場からここまで水を運ぶ方がよっぽど骨さ。十回は往ったり来たりしなくちゃならないからね。」

## マヨサの渡し舟

---

マヨサと出会ったあの日からしばらく経ったある朝、水汲みを終えたセヲはアユキを連れて、服部（はとりべ）の郷の近くにあるナガの池に行きました。

セヲはナガの池で水鳥たちを眺めるのが好きでした。冬の間は色々な姿のたくさんの水鳥が水面を漂っていたナガの池でしたが、春も半ばを過ぎた今時分になると大方の鳥たちは北へと渡ってしまい、何組かのマガモの番（つがい）が残るだけです。茶色の胸に白い首輪、頭の緑も鮮やかなオスが、茶色と黒のまだら模様メスの傍らを泳ぎながら、黄色いくちばしをさかんに動かしてしゃべっているのを眺めながらゆっくり歩いていると、池のほとりを巡る道ばたに、淡い肌色をした卵が産み落とされているを見つけました。鶏（にわとり）のものよりわずかに大きいその卵がころがっている辺りには、水鳥の巣らしきものは見当たりません。

「親鳥が歩きながら産み落とすなんてことがあるのかな。それとも、カラスかイタチにでもいたずらされたんだらうか。」

セヲは腰をかがめて卵を拾いました。指先が感じるしっかりとした殻の厚み。ひび一つ入っていないきれいな形。すっかり冷えてしまっているにもかかわらず、まるで小さな埋み火を手のひらでそっと包んでいるようなしっとりとした感触に、セヲはしばしの間うっとり佇んでいました。

あちらこちらの藪に鼻を突っ込んで道草を食っていたアユキが、ようやく後から追いついてきました。立ち止まったまま動かないセヲを不思議そうに見上げ、彼のまわりをクンクンと嗅ぎ回っていたアユキは、不意に尻尾をピクンと立てると小走りに歩きだしました。そして二十歩ほど先で立ち止まり、自分もセヲと同じものを見つけた嬉しさに、尻尾を左右に忙しく振りながら鼻先で転がしはじめました。

「だめだ！」

セヲは慌てて駆け寄ると、アユキが見つけた卵を拾い上げました。そして、両の手のひらに並べた二つの卵を眺めました。

まるで太陽のかけらを、それも一度に二つも拾ったような気持ちでした。

「僕が一日中抱えていればヒナが孵るかもしれない。もしうまくいったら僕が親だ。」

そんな幻を巡らせてしばらく楽しんでいたセヲでしたが、ふと

『親の元から離れた卵は、もう孵ることはない。』

そう教えてくれた父の言葉を思い出してしまいました。それなら、このまま腐らせてしまうよ

りは・・・。

「やあセヲ、美味そうな卵じゃないか！」

大きな声とともに現れたのは、腰に薄茶色の兎を二羽ぶら下げたマヨサでした。

「ああ、僕もそう思っていたところさ。」

セヲはそう言って笑いました。

「なにがおかしいんだ？」

「いや、何でもない。家に寄っていくんだろう。」

「ああ。今日はみやげもあるぞ。」

二人はそれぞれの犬を連れて、セヲの小屋へと歩いていきました。

---

マヨサは時おりマカミを連れてセヲの家を訪ねるようになっていました。

セヲの家は、マヨサの暮らす大伴部（おおともべ）の郷の東、トツカの江を挟んだ向かいの丘の端にあります。道に迷って初めてセヲの家を訪ねた時、マヨサは向こう岸に立ちのぼる郡衙（ぐんが）の狼煙を目にして、夜通し歩き回ってたどり着いた場所がこれほどしか離れていないのかと驚きました。郡衙というのはこの辺りを治めるハブの郡の役所であり、マヨサの父・コワクビは武事を司る大伴部の長として、毎日そこに出仕しているのです。

しかし、セヲの家から目と鼻の先に見える大伴部の郷に帰るには、ぐるっと遠回りをしなければなりません。ここ十数年の間に繰り返し起きる地震のたびに少しずつ水面が下がっているとはいえ、トツカの江を渡るには舟を使わなければなりません。しかし、セヲの家の辺りには他に誰も住むものはいないため、渡し場は作られていなかったからです。

マヨサがセヲの家から自分の家に帰るためには、いったん郡衙に隣り合う大伴部の郷に背を向けて東へと半里ほど進み、土師部の郷を通り抜けたところで南へと向きを変え、ほどなく現れる社（やしる）で今度は西に向かって曲がり、そこからは左手にイニハの浦を望む一里の道を歩かなければなりません。

歩くことは苦にならないマヨサでしたが、すぐそこにあると分かっている場所に行くためにわざわざ遠回りをするのが癪にさわる彼は、さっそく人を使ってトツカの江に渡し場を作らせました。

「あそこを渡れば、あっという間だね。」



「ああ、あつという間だ。郡衙に用がある時は使うといい。」

「でも、景色を楽しめないな。」

「景色を眺めたい時はアヅマの山にでも登るさ。」

「そうか。」

いかにも「やっぱり僕は歩くよ」と言っているセヲの口振りが、マヨサの癪にさわりました。

「おまえが作ったあの水甕を運び上げる仕掛け、あれだって同じだろう。」

「同じ？」

「ああ、同じだ。どちらも楽をするための工夫だ。」

「そうだね。」

セヲはやはり心からうなずいてはいない、マヨサはそう思いました。それでもセヲがうなずいたのは、言い争いになるのを嫌っているからだとも思いました。二人の仲を壊したくないという、セヲなりの気の使い方なのだろうと思う一方で、それがとてもじれったくも感じたマヨサはさらに言葉を続けました。

「今おまえがそうして捏ねている土、その土で作る器（うつわ）や甕だってみんなそうだ。注ぐほどに漏れていく、草で編んだ器で食う汁を美味しいという奴などはいない。」

「うん、そうだね。」

「そうだろう。だからおまえも、あの渡しを使うと良い。」

「でも、僕がいま作っているのは器じゃない。」

「じゃあ何だ。」

「ムササビさ。」

そう答えたセヲの笑顔を、アユキがペロッとひと舐めしました。

## アツマの山

---

夏も終わりに近づく頃、マヨサはセヲを伴って郡衙の東側にあるアツマの山に登りました。

山といってもそれは、あたりに比べて大ケヤキほどの高さに盛り上がった、牛が伏せたような形をした高台といった程のものです。しかし、もともとハブのなかでも高いところにあるため、その頂きからはカトリの海をとり囲む様に畝畝（うねうね）と連なる低い丘が、あるところでは海に突き出し、あるところではなだらかに内くぼんでいる景色を見渡すことができます。

風にさざめく碧の水面と、それを縁（ふち）取るように彩る稲の黄金（こがね）色。

丘の林の合間々々に拓かれた畑には、刈り取られ煮干された黄緑色の麻が並んでいます。西の彼方に横たわる台地の遙か向うには、なめらかな深い蒼色の山影が、まるでそこがこの世の中心であるかのように、大空に向かってそびえているのが見えます。

「確かに、ここからの眺めは美しいな。」

セヲは嬉しそうに、ゆっくりとからだを四方に巡らせました。アユキも尻尾をぐるぐる回しながら、辺りの匂いを嗅ぎ回っています。

「ああ、でも。」

大きな松の木の根元に祀られた祠（ほこら）の脇に腰を下ろしたマヨサが、マカミの首を退屈そうにいじりながら言いました。

「ここから見える海は狭い。」

「そうかな。」

「ああ、狭い。」

「ひとを誘っておいて、妙な言いようだね。」

「ほら、あそこに見えるマカタの館（やかた）の先でもうイニハの浦は行き止まりだ。」

「でも、北のほうをご覧よ。カトリの海はツクバの峰の方まで広がっているよ。東のほうにはほら、煙が上がっているのが見える。あそこはカトリの宮、それともカシマの宮の辺りかな？」

「この山がアツマ山と呼ばれるわけを聞いたことがあるか。」

「いや、知らない。」

「この山は遙か昔、東（あずま）の地を平らげるために進んだヤマトタケルの命（みこと）が築かれた山なのだ。」

「そうなのかい。」

「この場所からあのフジの高嶺を望んで、旅のさなかに失われた妃へ『吾が妻よ』と声をかけられた。その声は三枚のタラヨウの葉に印（しる）され、命の剣と、命にお使いしてこの地にて亡くなった吾が祖の亡骸と共に、この山の下に埋まっている。」

「ふうん。」

遙か東の彼方に立ち上る幾筋かの煙を眺めるセヲは、マヨサの言葉を背中で聞きながら、まるで魂がさまよい出たかのようにうわの空で応えました。

「おまえは信じないかもしれぬが、本当のことだ。命に従ってこの地までやって来た大伴部の血が、俺に教えてくれるのだ。」

西の彼方に高くそびえるフジを見やりながらそう話すマヨサの勇ましげな声に、セヲはふと我に返って尋ねました。

「マヨサも戦（いくさ）に出たいのかい？」

「別にそういう訳じゃない。俺が生まれてこのかた、戦などというものはおきてはおらんしな。」

「良いことだ。」

「だが、あのフジの向こうへ行ってみたいと思う。」

「行ってどうするのさ。」

「俺の祖先の地を見てみたいのだ。我ら大伴部はヤマトタケルの命とともにここよりさらに北へと進んだ者もあれば、ヤマトの国に残り国造りをした者もある。」

「ヤマト？」

「このイニハの国よりも優れてまほろばであるらしい。そんな国をこの目で見て、その国を造った同胞（はらから）と話をしたいのだ。」

「同胞・・・か。」

セヲは、拾った卵を両手で包み込むように、その言葉を繰り返しました。

「そうだ、マツ姫のところへ行こう。」

マヨサはやにわにそう言うと、アヅマの山の頂きから下り始めました。

「マツ姫って？」

マヨサの後を追うセヲは、慣れない急な坂に滑らないよう足を踏みしめて下りていきます。

「ここから北へ少し行った林のなかに庵（いおり）があるのだが、そこに住んでおられる姫だ。」

「あの辺りに郷はないと聞いているけど。」

「ああ、郷はない。この春に、吾が叔父に伴われてヤマトの国のアスカの都より下られた蘇我（

そが)の姫が、わずかな伴の者と住んでいる。」

「蘇我の姫？」

「ヤマトの大臣（おおおみ）を務めておられるお方の、姪御にあたる姫だ。」

「そのような姫が、なんでこのハブに？」

「姫はな、病を患っておいでなのだ。顔も手も、鱗（うろこ）のように固くなる病だ。その病を癒す薬となる草がこの地にあるらしい。」

「うつるのかい、その病は。」

「うつるものか。俺は、姫がこの地に参られてより何度もお会いしているが、この通り何ともない。なのに吾が父は、災いがうつらぬよう姫のことを口にするこすらまかりならぬ、との触れを出しておる始末だ。近くの郷の者も皆、姫を龍の化身、マツ姫ならぬタツ姫だと怖れて近づかぬ。まったく愚かなことだと思わぬか。しかし、そんなことより」

不安げなセヲをよそに、マヨサは楽しそうに話し続けます。

「姫はな、ヤマトの国より金色に輝く人形（ひとがた）と共に、この地に下られたのだ。あの輝きはまさにヤマトの輝きだ。」

「金色の人形？」

セヲは、自分が土で作る埴輪のことを思い浮かべましたが、その姿はどうにもピンとくるものにはなりません。しかし、そのことがかえってセヲの心を揺らしました。

「なんだろう、それは。」

「姫は御仏（みほとけ）とも薬師様とも呼んで奉っておられるが、俺にはよくわからぬ。しかし、あの目にも眩しい姿を見れば、おまえもヤマトの国へ行ってみたいくなるぞ。」

ようやく話に乗って来たセヲの気持ちを煽りながら、まるで無邪気に遊ぶ子供のような足取りで進んでいたマヨサでしたが、不意に歩みを止めると後からついて来るセヲを遮りました。

「どうしたんだい？」

「今日はよそう。ほかに客があるようだ。」

マヨサの眼差しの先には、蘇我の姫の庵の方角へと馬が進む、伴連れの若い男の姿がありました。荷籠を背負わせた伴の者の前に行くその若者は、鮮やかな萌葱色の衣を濃い朱色の帯で締め、まるで宙に浮いているかのように静かに馬を操って林の道を進んでゆきます。

「本当に間の悪い奴だ、あいつは。」

ついさっきまでの楽しげな表情にかわって、マヨサの顔には苛立ちの色が浮かんでいるのが見

て取れます。

「知り合いかい？」

「ああ。」

「誰？」

マヨサは答えませんでした。

郡衙の方へと踵を返した二人は、しばらく黙ったまま歩いていましたが、やがて思い出したようにマヨサが口を開きました。

「おまえたち親子も、どこの郷の者でもないと言っていたな。」

「ああ。」

「寂しくはないのか？」

「何が？」

「いや、いい。」

マヨサは、セヲが父と母のどちらとも似ていないことを思い出し、話をやめました。セヲと共に時を過ごすようになって言葉を呑み込むことが多くなった気がする、マヨサはそう思いました。

しかし、今日はセヲが言葉をつなぎました。

「近くに友がいないことなら、確かに寂しかったさ。マヨサと会うまでは。」

「そうか。」

「いつもは気にしてはいないけど、父さんと母さんが老いていることを思い出すと寂しくなることもあるよ。じきに先立たれるのだろうからね。」

「確かにおまえの両親は俺の父や母と比べると、ずいぶん年を重ねているようだな。」

「僕は」

セヲは、今まで誰かに話したくても話す相手のなかった思いが溢れ出しそうになるのに気がつき、慌てて口を閉じました。

「いや、何でもない。」

ツクバの峰をいつにも増してくっきりと映し出して吹く北の空からの風に、セヲはそっと腕を擦りました。

ある日の昼下がりに、マヨサは父である大伴部の長に呼ばれて、ハブの郡衙へ出かけました。

郡衙にいくつも設けられた倉には、見事に織り上げられた麻布（あさぬの）や、刈り取られたばかりの陸稲（おかぼ）などが続々と運び込まれています。作物を国の長である国造（くにのみやつこ）に納めるまでの間、盗賊から守ることがそれぞれの郡の大伴部の民の務めです。そして、納められた作物を遥かヤマトの大王（おおきみ）のもとへと運んで旅するのも、それぞれの郡の大伴部の長の一族の役目でした。

この何年かの中に、ハブの郡衙の倉の数はとても増えました。それは、ハブの郡で収穫される作物が豊かになったためだけではありません。イニハの国の各郡から国造に納められる作物の全てが、ここに集められるようになっていたからです。イニハの国のそれぞれの郡が豊かになるにつれ、国造に納められる作物も増えていったのですが、それらを集めておくためにはマカタにある国衙の倉では足りなくなったため、マヨサの父がハブの郡衙を拡げ、そこに建て増した大きな倉を国造に差し上げたのでした。そしていつしか、納められた作物をイニハの国からヤマトの大王のいるアスカの宮まで運ぶ務めも全て、ハブの大伴部が任されるようになったのです。そのためイニハの国の人々のなかには、「国造へ作物を納める」とは言わず「ハブの大伴部に納める」と言う者さえいるほどです。

鼠獲りに放された猫たちも煙たがる、倉をいぶすために焚かれた虫除けの香り草の匂いで白く煙る前庭を抜け、マヨサは政（まつりごと）の館へと向かいました。

館の広間では、父でありハブの大伴部の長であるコワクビと、コワクビの補佐役であるソワヒコが待っていました。

「なあ、マヨサ。」

「はい、お館様。」

マヨサは改まった口調で、そして身を乗り出すように答えました。

「どのようなお指図でも、なんなりと。」

「今日呼び出したのは、素舞（すまい）の会（え）のことについてだ。」

「は？」

「じきに催される素舞の会だ。」

「なんだ、そんなことか。」

マヨサは、あからさまな落胆の表情で父の顔を見返しました。

「そんなこととは何だ。」

「俺は、ようやくヤマトへ遣わしていただけるものと思っていたのですよ。素舞の話なら、わざわざこんな場所でしなくともよいではありませんか。」

「今年のヤマト行きも吾（われ）が仰せつかっておる。」

コワクビの隣に控えたソワヒコが口を挟みました。

「ハブの長の名代としては、その方はまだ若輩であろう。」

「そんなことはない。俺はもう十六だ。ほかの郡では俺と同じ歳の者を出しているとも聞く。それに」

「それに？」

ソワヒコの促しに、せっかく呑み込もうとした言葉がマヨサの口をついて出ました。

「俺があなたと素舞をとったら、俺が勝つ。」

ソワヒコは苦笑して、穏やかにたしなめるように言いました。

「しかしな。姉上、いや奥方さまは、未だにそなたのことを深く案じておられる。」

マヨサよりも十歳も歳が離れていないソワヒコでしたが、その落ち着いた物腰からは、まるで父と同年であるかのような雰囲気漂っています。マヨサが答えを探す間に、父がゆっくりと、そしてはっきりと告げました。

「おまえは吾の跡を継ぐ者だ。そのために備えねばならぬ。」

「俺は、素舞だけではなく、剣でも弓でも誰にも負けません。」

「ハブの民の暮らしを安んずるためには、戦の技ばかりでは足りぬのだよ。」

「何が足りぬのですか。」

父に食って掛かるマヨサを、ソワヒコが制して言いました。

「この館が『政の館』と言われていることは、そなたも存じておろう。」

「存じています。でも、それこそ俺の腑に落ちぬことなのです、父上。」

俺は父と話しているのだ、そう言わんばかりにマヨサは答えました。

「腑に落ちぬ、とは？」

「政は国造がなされること。そして、国造は大壬生部（おおみぶべ）から出ることが代々の決まり事。吾ら大伴部の任ではないのではありませんか。」

「おまえも知っての通り、国造には長く病に伏せっておいでで、またお子も姫君しかおられぬ。」

このようななか、国造をお支えする大伴部の者が、それぞれ任されている郡の政についてもお助けするのはあたりまえの務めだ。」

「そなたが、ただの戯れで狩三昧に耽っているわけではないことは、お館さまも吾も存じている。」

ソワヒコが再び口を挟みました。

「しかし、ほかの者がみなそうとは限らぬのだよ、マヨサ。そなたが戯れの日々を過ごしている、そう思っておる者どもに吾がいくら『あれは戦の技を磨いているのだ』と説いたところで、そなたを見る目はたやすく変わるものではない。」

わずかな沈黙の後に、父コワクビは厳かな口調で命じました。

「此度（こたび）の素舞の会で、おまえが独り素舞を奉納するのだ。」

「俺が独り素舞を？」

「そうだ。」

「しかしあれは、国造の家の者が舞う習わしではありませんか。」

「今年からおまえが舞うのだ。」

「今年から？ では、誰とも組み合えないのですか、俺は。」

「おまえはもう、人とは組み合わなくて良い。心を清くし、イツコリの神の御霊（みたま）と見事に組み合うことが出来れば、ハブの郡の者はもちろんのこと、イニハの国の誰もがおまえのことを認めるようになるだろう。」

「しかし」

「義兄上は、大伴部の長として命じておいでなのだぞ。」

ソワヒコの言葉に、マヨサは黙って引き下がるほかありませんでした。

館を出たマヨサは、ひとつ大きくため息をつきました。そして、高床の下から倉をいぶしている煙に咽せて咳き込むと、瞼の裏がヒリヒリとする目を擦りながら郡衙を後にしました。

「あやつに独り素舞が舞えるであろうか。」

館の広間では、コワクビもため息をついていました。

「イツコリの神がご降臨くだされば、きっと。組む相手があれば、マヨサの無双は自惚れではありませんせぬから。」

「イツコリの神はあやつを素舞の相手と認めて下さるかどうか、大御心を現してくださるのか、それを案じておるのだ。」

「それはわかりませぬ。これまで、大壬生部の者としか組み合われておられぬのですからね。」



「しかし、神霊の大御心を現せぬ者に、国造が政の全てを任せることはあるまい。そして、政を任せられぬ相手と縁（えにし）を結ぶことなど、なおさら考えられぬ。」

「ご案じなさいますな、義兄上。イツコリの神の姿は誰にも見ることも出来ませぬ。それは、国造の一族といえども同じこと。例えご降臨なくとも、それを知ることがかなう者などありませんや。」

館の明かり取りからさす陽の光に薄く漂う香り草の煙を眺めながら、ソワヒコは穏やかに答えました。

気がつくと、マヨサはトッカの江の渡しに来ていました。

どこから一緒だったのか、彼の足もとには犬のマカミが付き従っています。

マヨサの忠実な僕（しもべ）であるその黒い犬は、主人（あるじ）が彼しか使うことのない小舟に乗り移ると、その後に行きました。

マヨサが水ぎわの杭につないだ舳を解いて竿を手にとると、竿の先に止まっていたアカトンボがあわてて飛び立ちましたが、しばらくあたりを回っていたかと思うと、再びもとの竿先に戻ってきました。しかし、小舟を漕ぐマヨサのせいでそこに落ち着くことが出来ず、小舟の舳先にとまり直しました。

昨日、一昨日と戦（そよ）いでいた、秋の訪れを感じさせるさわやかな風が今日は止んでいます。また夏が戻って来たような陽射しを映す水面をかすめ、まるでツバメかと思間違えるほど大きなオニヤンマがゆっくりと横切っていました。

向こう岸の藤の木の上からアオサギがこちらをじっと見ていましたが、マヨサの舟が近づいて来るのを見定めると、ゆっくりと羽根を広げて左手の方へと飛び立ち、大きく一巡りした後に何処かへと去って行きました。

「何もしやしないさ」

そうつぶやきながら、マヨサは着いた対岸の渡し場へと降り、小舟を杭につなぎました。舳先にとまっていたアカトンボはようやく飛び立つと、もと来た方へと戻って行きました。その羽根の煌めきを目で追うマヨサのふくらはぎを、マカミとは違う感触で撫でる尻尾があります。それは、マヨサの足もとに静かに佇むマカミにむかって、さかんに鼻面を押しあてちょっかいをかけている白い犬の尻尾でした。

「やあ、アユキ。おまえの主人は今日も土を捏ねているかい。」

「今日は栗とアケビを集めているよ。」

渡し場から伸びる小道の奥から、セヲの楽しそうな声が聞こえました。

「まだ少し早いけど、それでもこれだけ採れた。」

そう言いながら、セオはまだ少し堅そうな薄紫のアケビの実を縦に割くと、マヨサに差し出しました。厚い皮のなかの、黒い種を包む半透明のみずみずしい房を口に含んだマヨサは、やがて黒い種だけ吐き出すと言いました。

「確かにまだ早い。でも、アケビの味はするな。」

「浮かない顔をしてるね。何かあったのかい。」

「セヲ、素舞だ。」

短く答えたマヨサの目を、セヲは静かに見返しました。

「俺と素舞をとってくれ。」

「わかった。でもその前に、僕の家まで駆けくらべだ。そら、マカミもアユキも走れっ。」

白と黒の二匹の犬の首をポンと叩くと、セヲは坂を駆け上って行きました。

「こら、マカミっ。主人を置き去りにするなっ。」

そう呼びかけながら駆け出したマヨサの声に、ハッと振り向いたマカミの慌てたような顔がおかしくて、マヨサの顔にも少し笑みが戻りました。

マヨサとセヲは、何度も何度も組み合いました。

年長の上にながしりとした体つきのマヨサに、セヲが敵うわけはありませんでしたが、それでもなかなか良い勝負が繰り返されました。

どこの郷からも離れて住むセヲには、素舞を取るような友はありませんでした。それにもかかわらず、マヨサがこれまで素舞を取った誰よりも、セヲは組みがいのある相手でした。マヨサよりも小さな身体を一層低くして懐に入り込み、マヨサの腰に回した両腕をしっかりと固めると、じりじりとにじり寄って浴びせたおそうとします。そうかと思うと、立ち会いに大きく身を翻してマヨサの背中に回り込み、膝の後ろを蹴って重心を崩そうとしたりもします。

白と黒の二匹の犬は少し離れたところでじゃれあっていましたが、飽きてしまったのか、並んで伏せて主人たちの果てしない組み合いを眺めています。

やがて二人は、疲れではなく空腹に耐えられなくなって、共に腰を下ろしました。

「やっぱりマヨサには勝てないな。」

セヲの顔には悔しげな色は見え、ただ楽しそうです。地面に仰向けになったマヨサは、ひつじ雲の列が北東へと流れる空を見上げながら言いました。

「おまえ、どうしてそんなに組めるのだ。」

「どうしてって、遊び相手が父さんしかいなかったからかな。」

「おまえの父御（ててご）は年寄りではないか。」

「僕が小さい頃は、父さんももう少しは若かったさ。それに、父さんは今でも素舞の名人だ。」

そう言ってセヲが向けた眼差しの先から、少ししわがれた声が聞こえてきました。

「その裸の二人、年寄りと夕餉（ゆうげ）を共にはしてくれぬか。」

マヨサは身体を起こすと、大きな声で答えました。

「ありがたく馳走になります。」

トッカの江の向こうでも、郡衙の周りの大伴部の郷から立ち上る幾く筋かの煙が、沈む夕陽に  
橙色に照らされていました。

## 馴れ初め

---

地面を丸く掘り、そこに立てた四本の太い柱のその上に茅を葺いた小屋のなかで、マヨサはセヲと彼の両親と共にシジミ汁をすすっていました。

「まだ少しなら芋も残っていますよ。」

小屋の真ん中に据えられた炉に細い薪を焼くべながら、セヲの母が言いました。

「明日であれば、赤飯（あかい）を炊くことも出来たのですがね。」

「明日？」

「ええ、明日は服部（はとりべ）の郷の者たちが、国造さまに望陀布（もうだぬの）をお納めする日ですから。」

炉の灯りに照らされた、皺だらけの顔が嬉しそうです。それでも合点がいかぬ、といった面持ちのマヨサに、今度はセヲの父が答えました。

「吾が妻はもともと服部の者なのじゃ。いまでも、請われて望陀布を織っておる。」

望陀布とは、普通の麻布に比べてとても細かい麻糸を密に織り込んだ布で、他の布に対して倍の値打ちがあるとされています。

「確か、望陀布は服部の長の一族しか織れぬもの。そうではありませぬか？」

「さすがは大伴部の長の息子よ。さよう、この者は服部の長の娘であった。」

「そのような方が、なぜこのような人里離れた所に？ いえ、そのような方を娶られたあなたこそ、なぜこのような所に暮らしておいでなのですか。」

マヨサは、セヲと初めて会った日からずっと抱いていた、セヲの家族の三人だけがどこの郷にも属することなく暮らしている不思議のわけを知りたくなりました。

「父さんの昔話は長くなるぞ。」

「もとより今宵は宿らせてもらうつもりでおるから、いっこうに構わぬ。芋をいただけますか、母御（ははご）殿。」

「おやおや、なんと厚かましいこと。」

セヲの母はそう言って笑いながらマヨサから器を受け取ると、土鍋に残った芋を集めてよそいました。

「儂にも吾が妻にも、そなたたちと同じように若い頃があったのじゃ。」

セヲの父は自分の碗の汁を飲み干すと、ゆっくりと話し始めました。

「儂が生まれたのは、土師部の長の家であった。そなたも知っての通り、土師部の者は土を捏ねて器を焼き、埴輪を焼く。死人を葬る奥都城（おくつき）も築く。田畑へ引く水を貯める池も作る。儂は土師部の長の家に伝わる様々な技を受け継ぐ者の一人として、幼き頃より父につれられ、このハブの郡のあらゆる場所へ出かけては父たちとともに様々なものを作ったものだ。そなたの父上の父上、先の大伴部の長の奥都城もこの儂が築いたのじゃぞ。」

「それはまことですか。」

セヲの父が何者であるのかを知ったマヨサの胸に、初めてセヲと出会った日に彼の仕掛けを見た時と同じ驚きが甦りました。それとともに、これまでセヲたちの家族に感じていた不思議さのいくつかが腑に落ちた心持ちにもなりました。

「ああ、まことじゃ。むろん、ひとりで築いたわけではないがの。」

揺れる炉の炎ごしにマヨサの顔を眺めながら、セヲの父は笑って話を続けました。

「あるとき、儂はほかの土師部の者たちとともに、服部の郷へ出向いたのじゃ。ナガの池の堤が破れ、麻畑を浸してしまったということな。堤を治すあいだ、儂らは服部の長の住いの近くの小屋に寝泊まりしておったのだが、毎朝早くから機を織る音で起こされてな。働き者なのは良いが、儂らがおる間は少し控えてくれぬか、そう頼みにいった機織り小屋におったのがこの女であったのじゃ。」

そう語るセヲの父の脇で、たくさんの皺をたたえた老女の笑顔が、炉の灯りに照らされています。

「その娘を見初めてしまったその日から、儂の苦しみは始まったのじゃ。」

「苦しみとは？」

マヨサの瞳には、好奇心の色がますます募っています。

「大伴部の長の息子であるそなたなら、わからぬではなからう。」

「というと……。」

「掟じゃよ、この国の掟をそなたは知らぬのか。」

「俺は政には疎いので。」

そう言うマヨサの瞳が一瞬、虚ろになったようにセヲには見えましたが、セヲの父は何も気づかぬ素振りで話を続けました。

「さようか、それならそれでよい。この国ではな、いずれの部（べ）の間であろうと、長の家の者同士の縁組みは国造により固く禁じられておる。異なる部の民が縁組みにより力を増し、国造を脅かすことなきように、との定めじゃ。この掟、このイニハの国にイツコリの命が降りられてから破られたことがないと聞く。しかし、儂はどうしても吾が真心に背くことは出来なかった。なぜなら、この女も儂のことを好いてしまったのじゃからな。ナガの池の堤を直し終えてしまうと、儂らはもう会うことが叶わなくなる。そこで儂は夜の闇に紛れて・・・」

皺の奥で悪戯っぽい瞳を光らせながら、少し前のめりになってみせる年寄りにつられて、マヨサもつい胸の前で組んでいた腕を膝につきました。

「夜に紛れて？」

「・・・ナガの堤を切り行った。」

「なんと、そこまでなされたとは。」

「若気の至りじゃ。しかし、同じ手を何度も使える訳もなく、やがて儂と服部の長の娘が好き合うておることが互いの郷の者に知れる所となってしもうた。」

火が落ちかけた炉にセヲの母が薪を焼（く）べ足すと、小屋のなかは再び明るくなりました。

「儂はてっきり別れさせられると思っておった。儂は既に長の技の多くを身につけておったし、この女も望陀布を織る技を会得しておった。そんな二人が掟を破って一緒になるとなれば、このハブが大きく乱れずにすむわけなどないからのお。ところがじゃ。」

セヲの父はそう言うのと、いったん語るのをやめました。

「ところが、どうしたのです？」

「そなたを前にして言うのは少し憚られることではあるが」

マヨサに促されたセヲの父は、しばらく彼の顔を見つめた後で話を続けました。

「土師部と服部の者には代々、国造の大壬生部と大伴部に対し含むところがあってな。含むところと言っても、刃を向けようなどという大それた話ではない。ただ土師部も服部も、もともとこの地を富ませていたのはそれぞれの祖神（おやがみ）であり、後より入って来たヤマトタケルの命にイニハの国を譲ったのだという語り伝えを奉じておるのだ。そのようなわけで、吾が父とこの女の父は共に計らい、国造には儂とこの女はどちらも死んだことにして、夫婦（めおと）とな

ることが許されたのじゃ。」

「それで、郷からはなれたこのようなところに。」

「ああそうじゃ。今では土師部も服部も新たな長が立っておるし、農らが夫婦であることは何の障りにもならぬ。それどころか、時おりそれぞれの郷から、農らの技を乞いに人がやって来ることもある。その礼にと食いを置いていくこともある。」

「これからも、どちらの郷にも戻らずにここで暮らすのですか？」

「ああ、ここの暮らしは気楽で良いからの。」

そう言って妻の方を見やるセヲの父に向かって、マヨサが言葉を返しました。

「それでは、セヲはいつまでもひとりではないですか。」

「そのことはわたしらも案じておるのです。」

セヲの母が答えました。

「見ての通り、わたしらは老いさき短い身。あと何年のあいだセヲと」

そう言いながら息子を見やる母の眼差しをわざと外してマヨサの方を向いたセヲは、母の言葉を遮るように言いました。

「マヨサという友がいる。僕はそれでいいさ。」

「そう言ってくれるのは嬉しいが、でも、おまえの土師器（はじき）造りの技も、あの水甕を谷津からこの高台へと引き上げる仕掛けも、立派な土師部の技であろう。」

「でも、僕は土師部の者じゃない。」

「何を言う。さっきの素舞にしても、古（いにしえ）より伝わる土師部の技を色々と繰り出していたではないか。あれは土師部の者にしか出来ぬ事だ。何よりおまえの父御殿は、縁を断ったとはいえ土師部の長の血を引くお方ではないか。」

そのとき、小屋の外で犬のアユキが小さくうなり声をあげました。餌を探していた狸が、林から迷い出て来たのかもしれませんが。小屋を葺いた茅の隙間から入る風は、気がつけばすっかり月夜の匂いです。



「セヲはな」

父がゆっくりと口を開いた時、それをまたセヲが遮りました。

「僕のことより、そろそろ自分の事を話したらどうだい。わざわざ力自慢をしに来たわけではな  
かろう。」

小屋のなかを橙色に照らす炉の光を映すセヲの瞳は、自分の話になる事を避けているようでもあり、素直にマヨサの訪ねて来た訳を知りたがっているようでもありました。どちらにせよセヲの言葉は、素舞をとっただけでは消し去る事が出来ない憂いを抱えるマヨサの胸を突きました。

「今年こそはヤマトへ遣わされるものと思っていたのだが、だめだった。」

「そうか。」

「昨年、ウナカミの郡からは長の名代として、俺より年下の者が加わったのだぞ。なぜ俺はいつまでも子供扱いされねばならぬ。」

「子供扱いされているのかい？」

「ああ、そうだ。素舞をとったら誰にも負けぬこの俺を。」

「しかし、な」

セヲの父が言葉を挟みました。

「ヤマトへの道程は決して楽なものではないと聞くぞ。いたるところに賊が潜んでいるというし、越えねばならぬ険しい山や激しく流れる川もあるそうではないか。」

「だからこそ、吾ら大伴部の者が遣わされるのでしょう。自慢ではないが、去年もその前の年も、素舞の会での組み合いではこの俺が一番強かったのだ。それなのに叔父上は今年も俺を外した。」

マヨサはセヲの母の顔を少し覗くと、炉のなかで赤く燃える木切れに目を落として、独り言のように続けました。

「母が俺の身を案じてくれている、というのはありがたいことだと思っている。しかし、ウナカミの郡の息子も何ごともなく戻って来て、誇らしげにアスカの宮のみやげ話を聞かせていたではないか。」

「素舞の会であらためてその力を示せば、ヤマトへ遣わしてもらえるんじゃないか。」

「それが叶わぬのだ。」

セヲの言葉に答えるマヨサのいらだちが移ったかのように、灰になった薪が崩れて火の粉が舞い上がりました。

「今年は、俺は誰とも組み合えぬ。」

「どうして。」

「独り素舞を舞うのだ、俺は。」

「独り素舞？」

それはセヲには初めての言葉でした。黙ったままのマヨサのもとに、セヲの母が甕から汲んだ水をそっと置きました。そして、セヲの父がマヨサに代わって話し始めました。

「セヲは素舞の会には出かけたことがなかったか。独り素舞とはな、国中の力自慢が組み合ったあと、国造の縁者がイツコリの命と組み合うのじゃ。」

「イツコリの命と組み合う？」

「そうじゃ。」

「でも、イツコリの命という方は、大むかしの国造ではなかったですか？」

「そう、ヤマトよりヤマトタケルの命に付き従い、この地に下った大壬生部の一番はじめの長の名じゃ。そして今は神となられて、このイニハの国をお守りくださっておる。」

「じゃあ、マヨサは神さまと組み合うってこと？」

「しかし妙じゃな。なぜ、大伴部の者が独り素舞を舞うのであろうかの。」

セヲとその父は、それぞれの不思議を抱いた顔で互いを見やりました。マヨサはどちらにも答えず、炉の火を見つめています。

「もっとも、イツコリがこの地に降りられるその前は、独り素舞は土師部の者が舞っておったのじゃが。」

セヲの父は、炉で沸かした白湯を手にした碗に注ぐと、ふううと息を吹きかけて冷まし、一口含みました。

「さっきも語ったことではあるが、儂が生まれた土師部の一族は、後からやって来た大壬生部や大伴部の者たちにこの地を譲ったのじゃ。国造の館のある所をマカタと呼ぶのは、吾が祖神がこの地に下る前に住んでいた所の名を付けたことに始まる、儂はそう父から聞いておった。」

「土師部の祖神様は何処より参られたのですか。」

「この地より真西、遙かイズモの国じゃ。」

「イズモの国とは、ヤマトよりもさらに遠くと聞いておりますが、そのような所からここまで下

られたのですか。」

「ああ、そうじゃ。そして、そなたが得意としておる素舞も、もとはといえばイズモの国の土師部がこの地にもたらしたもののなのじゃ。土師部の素舞にはな、それこそイズモの国の昔から受け継がれておる形がある。」

「土師部の者たちの取る素舞にはみな似たような癖があると思っていたが、なるほど、そういうわけがあったのか。」

腑に落ちた様子でつぶやいたマヨサに、セヲの父が続けました。

「そうじゃ。独り素舞も元々は、オオクニヌシという国の幸を司（つかさど）っておいでの神と組み合って、次の年の実りを占う土師部の習わしであった。しかし、大壬生部と大伴部にこの国を譲った時より、それも国造に委ねられることとなったのじゃ。そして、もとより住まっておった土師部や服部の者たちや、後より入って参った大伴部やほかの部の民が互いの力自慢を競い合う素舞の会でも、国造の家の者だけはどの部の民とも組み合わせずに独り素舞を舞うこととなったのじゃが、その相手はいつしかイツコリの神となったのじゃ。」

「その独り素舞を今度はマヨサが取るんだね。」

セヲの言葉に、父はこの国で何がおきつつあるのかをはっきりと悟りました。しかし、敢えてそれを言葉にしようとはしませんでした。

「でも、触れることも見ることも出来ぬ神と、どうやって組み合んだい？」

セヲはマヨサの方を見やりました。

「知らぬ。そもそも、イツコリの神が降りてこられているのかどうかも怪しいではないか。」

「見たことはあるだろうか？」

「ああ、毎年見ている。何か決まった作法があるようだが、最後は派手に投げられて仕舞いだ。そうだ、父御殿」

マヨサはセヲの父に向き直って言いました。

「土師部には独り素舞の形は伝えられておりませぬか？ ぜひこの俺にその作法を授けて頂きたい。」

「あいにくだが、それは無理じゃ。」

「なぜです？ 俺が土師部の者ではないからですか。しかし、父御殿も土師部の者ではない。構わないではないですか。」

「そういうことではない。」

「ではなぜ？」

「土師部には何も伝わっておらぬからじゃ。」

そう言うと、セヲの父は冷めた白湯で唇を濡らしました。

「そなたの言うように、国造の者が舞う独り素舞には何か作法があるように思う。舞い手が必ず投げ倒されておるところからして、勝ち負けがイツコリの神に委ねられてはおらぬことの証じゃ。しかし、土師部の独り素舞は、真（まこと）にオオクニヌシの神と組み合うのじゃ。」

「真に組み合う、とは？」

「マヨサ殿、儂にはそれを上手く語って聞かせることは出来ぬ。さて、今日はもう寝るとしよう。明日の朝、セヲとともに土を捏ねると良い。そして何でも好きな形を象り、焼いてみると良い。」

「俺は独り素舞のことを知りたいのです。」

少し苛立ったように問い返すマヨサを諭すように、セヲの父は短く答えました。

「明日の朝、知れるじゃろう。」

外では北から渡って来た雁の声が、蛙の合唱をかきわけるように星空に響いています。セヲは、その声を聞くのはいつもの年よりもずいぶん早いような気がしました。

## マカタの人々

---

素舞の会（え）は、イニハの国の産物をヤマトへと運ぶ一行が旅立つ、その前の日に催されます。

その日の朝、セヲはアヅマ山の頂きに登り、マカタの館の方を眺めていました。晴れ渡る秋空のもと、静かに波打つカトリの海を沢山の舟が、様々な方角からマカタの鳥居河岸（とりいがし）に向かって見えます。イニハの国の各郡の主だった部の民の力自慢が、それぞれの文様をあしらった舟を漕いで、その昔ヤマトよりイツコリの命が降り立った地へと集（つど）っているのです。羽を広げた朱鷺（とき）が向き合っているような姿でカトリの海の浅瀬にそびえるマカタの大鳥居を、一艘ずつくぐって河岸に着いた舟から降りた若者たちは、はやる気持ちを抑えるようにゆっくりとマカタの館へと続く坂道を登って行きます。そのなかにマヨサもいるはずですが、セヲのいる場所からは誰もがごま粒のようにしか見えません。

「うまく舞えるだろうか、マヨサは。」

セヲはつぶやきました。

あの夜が明けた朝、マヨサはセヲと二人で水場から水を汲み、土を捏ね、思いのままの形をいくつも作り、そして焼きました。

「捏ねるとき、形を与えるとき、その時々には掌（てのひら）を感じるもの、指先を感じるもの、腕、肩、背中、首、そなたの身体が土から伝わる力を感じるのじゃ。そして、土を焼く炎の熱を感じるのじゃ。そなたの力と土からの力を分つことなく感じる事が出来たとき、炎とそなたの息とが連なって感じる事が出来たその時、そなたは土と水と火と風の全てに宿るオオクニヌシを知るのじゃ。」

そう語るセヲの父の言葉を聞きながら。そしてその日の夕方、マヨサは自分の作った品のなかから一つだけ手に取ると、マカミとともに帰って行ったのでした。それから今日まで、マヨサはセヲのもとに姿を現さなかったのです。

「行ってみようか、アユキ。」

最後の舟が鳥居をくぐったのを見たセヲはそう言うと、アヅマの山を駆け下りて行きました。

セヲとアユキが長い道のりを歩き終え、マカタの館の裏手のコウヅの森を抜けたとき、館から大きな歓声が上がりました。

館の庭まで入るのは憚られたセヲは、中を覗くことが出来そうな柵（ははそ）の木によじ登り、ごわごわとした枝の上に腰掛けると、素舞が行なわれている土舞台（つちぶたい）の方に目を向けました。

ちょうど、最後まで勝ち残った者同士の取り組みが決着を見たところのようでしたが、どこの誰が勝ったのかはセヲにはどうでも良いことでした。

彼は、友の姿を探して土舞台の周りを眺めました。息を荒くして土舞台をおりる若者の周りを多くの人を取り囲み、若者の身体を触って誉め讃えています。どうやら、今年もハブの大伴部の者が最後まで勝ち抜いたようです。しかしそれは、マヨサではありません。

土舞台に面した館の広間には、色の白い、しかし気丈そうな顔つきの少女が座っています。彼女を挟むようにして立つ侍女たちに対する態度や、侍女からの指図に従う衛兵の様子からすると、きっとあの娘は国造の姫なのでしょう。

そう見当をつけた少女の左手前には、刀を帯びて座る二人の男がありました。ひとは壮年であり、目から鼻にかけてマヨサと似た顔つきをしています。もうひとはマヨサよりは年上ですが、隣の男ほどではありません。しかし、その物腰は一見して思慮深そうでありながら、その座る位置からして目上であろう隣の男に対しても謙（へりくだ）る様子もなく、まるで全ての成り行きを見通しているかのような面持ちで座っています。素舞の会の熱気のなかにあって異彩を放つその男を、セヲは前にもどこかで見たことがあるような気がしました。

しかし、それが誰だったかを思い出すよりも先に、まずはマヨサを見つけようと再び目を庭に向けると、土舞台から少し離れたところに、静かに目を閉じて胡座（あぐら）を組んでいるマヨサの姿がありました。慌ただしく動き回る人々に囲まれながら、ひとり別の場所にいるかのようなマヨサを見つけたとき、不意にセヲのなかに一つの情景が甦りました。

「ああ、あの時の人だ。」

そう、国造の姫と同じ広間に座る若い男は、マヨサと二人でアヅマの山に登った日に、マヨサに誘われてマツ姫の庵へ向かう途中に見かけたあの若者だったのです。

## 独り素舞

---

「マヨサは稽古をしていたようだな。」

コワクビは隣のソワヒコに向かい、マヨサの背中を見ながら話しかけました。

「そのようですね。」

「うまく形になれば良いが。」

「ご案じなさいますな。相手が誰であろうと、イツコリの神は必ず降りられます。」

ソワヒコは、そこからは見えませんが、館の北側の森のなかにあるイツコリの命の奥都城の方角を眺めて言いました。

「場を弁えよ、ソワヒコ。」

「これは吾としたことが。いずれにせよ、最後に投げられさえすれば良いのですから、そのくらいのことはマヨサにも出来ましょう。欲を言えば、うつぶせに倒れず大の字に空を仰いでみせてくれば、民は憂いなく過ごせるというものです。それよりも」

ソワヒコは、コワクビの肩越しに国造の姫を見やりながら、言葉をつなぎました。

「明日の出立に先立ち、次のこと、くれぐれもお館様にお願いいたします。」

「そなたがヤマトより戻るまで何事も起こさぬということであろう。くどいぞ。」

「恐れ入ります。蘇我の姫をハブの地にお迎えし、田畑や奴婢（ぬひ）を分け与えて参られたお館様のお計らいが実るまであと一息。このことが大壬生部の者どもに知れることのなきよう、お館様にはくれぐれも国造を奉られ、僭越な振る舞いは努めてお控えください。」

「そなたの物言いを置いてほかに、僭越なるものなどあろうか。吾のことを案ずるより、ヤマトの大王のお許しを賜ることなく戻るでないぞ。」

「重ね重ね、畏れ入ります。」

コワクビの言葉に、頭を浅く垂れてソワヒコが畏まってみせたちょうどそのとき、鳴り物の音が響き、ざわめいていた館の庭は水を打ったようになりました。

マヨサが静かに立ちあがると、人々の視線は一斉に彼へと注がれました。国造の者ではない、ハブの郡の相伴部の長の息子が独り素舞を舞うということはもちろんのこと、そのわけについても様々な噂が既に広まっていたので、占われる翌年の作物の出来もさることながら、それとは別の関心もマヨサに集まっています。

ゆっくりと土舞台へと進んだマヨサは、病の国造の名代として中央に座する姫のほうに向きなおり、深々と一礼しました。再び土舞台の真ん中へとその身体を向けると、今度は腰を落として跪（ひざまず）き、両手を地面につけ、さらに額を舞台の上に押しあてました。しばらくの間そ

の姿勢を保った後、身体を起こすと中腰になり、両手を大きく拡げて深く息を吸い込み、そしてゆっくりと吐き出しました。

これらの仕草を何度か繰り返しながら、マヨサは少しずつ舞台の上で場所をかえていきます。館の外の柝の木の上のセヲには、マヨサの足が擦った後が左回りで渦を描いているのがよく見えます。独り素舞とはこのように舞うものなのか、セヲはそのように思いましたが、このような独り素舞は誰もが初めて見るものでした。しかし、誰もが余計なことは忘れて、マヨサの素舞に引き込まれています。

土舞台の上の渦が一巡り半ほどした時、セヲの周りの柝の葉が風に戦ぎました。何枚かの葉が枝からはなれ、館の庭のなかへと舞い落ちていったかと思うと砂埃とともに再び舞い上がり、まるで一本の太い柱に沿うかのようにくるくると回りながらマヨサの正面へと進んで行きます。マヨサは、それを迎えるように前へ出ると、大きく拡げた両腕でその柱を抱え込み、腰を落とししっかりと支えるような姿勢になりました。そして、じりじりと足を擦りながら舞台の真ん中へ移り、そこで一層深く腰を落としたかと思うと、

「ヤッ」

という大きな掛け声とともに一気に柱を放り投げたのです。

マカタの館の庭に、大きなよめきが起きました。会心の投げを打ち上気するマヨサとは裏腹に、人々は深い憂いの表情で互いの顔を見合わせています。

イツコリの神が投げられた。

それは、翌年の凶作を占うものだったのです。



はたして、年が明けるまでにはまだずいぶんと間があるうちから、イニハの国には大きな災いが訪れました。

素舞の会からひと月ほど経ったある夜、カトリの海の遥か西にそびえるフジの山が赤い火柱とともに黒々とした噴煙を上げたのです。そしてそれから数日の後、いつもの年よりも早い初雪がイニハの国を灰色に覆うなか、国造が亡くなりました。

「この分だと、次の秋の実りは本当に怪しいな。」

久しぶりに雪雲が晴れた空の下、トツカの江の舟着き場でセヲと肩を並べて釣り糸を垂れているマヨサは、まるで他人事のようにそう言うと、竿を上げて針を落とす場所を変えました。水面に新しい波紋が広がり、やがて消えていきました。

人里から離れて暮らすセヲの耳にも、災いはマヨサに投げられたイツコリの祟りであると噂する声が聞こえてきます。

「こんなことをしていいのかい。」

「なぜいけない。」

「なぜ、って。」

「俺はしっかりと独り素舞を、いや、このイニハの国の神としっかりと組み合った。あれがイツコリの神であったかどうかは知らぬが、この国の主であることは、組み合った俺にははっきりとわかる。」

「このところの災いを、マヨサのせいにする者がいるらしいじゃないか。」

「ああ、愚かなことだな。」

マヨサは竿を持つ手を替えると、冷えた右手を傍らのマカミの背中で温めました。

「俺の犬が黒いことまで災いの源だという者もいる。」

「そんなことまで。」

セヲは、あたりのくすんだ雪の上に足跡をつけて回っているアユキと、主人に寄り添って座るマカミを見比べました。

「この災いは俺のせいでもマカミのせいでもない。この国の主が俺との素舞を通して、災いが訪れることを皆に示したのだ。真（まこと）の独り素舞とはそういうものだろう。ただ」

「ただ？」

「俺がイツコリの神を投げたのは、吾がハブの相伴部が国造を蔑ろにしている現れだ、と言う者があることが気にかかる。」

「どうして。」

「そもそも、大壬生部の者でない俺が独り素舞を舞うことになったのは、いずれ国造の姫を娶ってイニハの国を治めることを国中に知らしめるためだというのだ。」

マヨサの話したことは、セヲも父や母から聞かされてきました。そしてそれは、大昔に土師部から国造へと独り素舞が移された話と合わせて聞くと、ただの噂ではないようにも思われました。

「そのようなこと、俺はお館様からは何も聞いてはおらぬ。そもそも俺は、政（まつりごと）など関わりたくもない。」

「確かにマヨサは政むきではないかもね。思ったことを素直に口にしすぎる。」

セヲはそう言って笑いました。

「何も判らぬくせに余計なお世話だ。しかし、まったく引かぬなあ、水が冷たいせいかな。」

マヨサも笑いながら、再び糸を垂らす場所を変えました。

それからしばらく、二人は黙ってそれぞれの釣り糸の先を見つめていましたが、結局その日は一匹の魚も釣れませんでした。

「じきに陽も落ちる。今夜は泊まっていくんだろ？」

「いや、獲物が無いのに厄介になるのは気が引ける。母御の薬湯を一杯頂いたら帰るさ。」

魚を釣るのをあきらめた二人は、うっすらと積もった雪に足を滑らせないように気をつけながら、北風が吹き抜ける林の坂道を小走りに上っていきました。既に暗くなった林を抜け、セヲの母が支度する夕餉の煙が立ち上る小屋が遠くに見えるところまで来たとき、アユキがセヲたちから離れて一目散に駆け出しました。アユキの駆けていく先には、小屋から出て来た二人の人影が見えます。アユキはそのうちのひとりに飛びかかると、うれしそうに尻尾を回しながらじゃれついています。

「あの様子では、きっと土師部のお館様だな。」

「土師部の長？」

「うん。たまのことだけど、厄介なことがあると訪ねて来るんだ。アユキはご馳走を持って来てくれる人と思っているようだけどね。」

土師部の長は、持て余しげにアユキの相手をしながらセヲの父と短い言葉を交わすと、小屋の外で待たせていた伴の者と連れ立って帰っていきました。その後を追いつがるアユキを、遠くか

ら呼び止めるセヲの声に振り向いた土師部の長は、その場で立ち止まってセヲたち二人が近づいて来るのを待っています。

「アユキ、おまえの主人を忘れたのか？」

笑いながら言う土師部の長に向かって、セヲは小走りに駆け寄りました。

「足止めしてごめんなさい。」

「いや、これほど好いてくれるのだ。悪い気はせんよ。もっとも、アユキが好きなのは吾ではなく、吾の荷物かもしれぬが。」

「今日はどんな？」

「どんなみやげをもってきたか、とな？」

「そんな、とんでもない。」

あわてるセヲをからかうような表情のまま、土師部の長はセヲの後ろから歩み寄ってくるマヨサのほうを見て言いました。

「そなたの独り素舞は素晴らしかったぞ。吾でもあのような素舞を取れるかは判らん。」

皮肉の色の全くない土師部の長の言葉に、マヨサは少しとまどいながら答えました。

「俺もそう思っています。だが、民は」

「真の独り素舞を舞う者が絶えて久しいのだ、気にかけることはない。それよりも、独り素舞とはあの一番で終わりでないこと、とくと弁えられよ。」

「どういうことですか。」

「オオクニヌシとあれほどの素舞を取ったそなたのこと、考えずとも自ずとわかろう。」

土師部の長はそう言うと、伴の者が持つ松明（たいまつ）に足もとを照らされながら土師部の郷へと帰っていきました。その背中を見送る二人に、小屋の入口に立って様子を見守っていたセヲの父が声をかけました。

「マヨサ殿、今晚は泊まっていつては下さらぬか。お頼みしたいことがあるのじゃ。」

その神妙な物言いに、マヨサとセヲは顔を見合わせました。そして、揃って小屋のなかへと入っていきました。

## 駆け引き

---

翌日、太陽が一番高く昇って空気がいくぶん温んだ頃、マヨサは父のコワクビとともに国造の館に召されていました。

「その方らを呼んだのはほかでもない。」

館の広間の真ん中に据えられた、国造の座に座った姫がいきなり切り出しました。コワクビとマヨサは館に上げられることなく、きれいに雪が払われた庭に敷かれた麻布の上に座られています。

「先に身罷られた国造の奥都城（おくつき）を築くことを申し付ける。」

「畏まりましてございます。ところでヒツキ姫、」

コワクビは、いつもの自分の席に座ることを許されない訳を尋ねようとしたが、それを遮るように姫が続けました。

「その方らが父祖を祀っているアヅマの山があろう。」

「いえ、あの山は遠くヤマトタケルの命の世に・・・」

コワクビは少し慌てた様子で語り始めようとしたが、またも姫に遮られました。

「吾が父の奥都城は、アヅマの山よりも高く築くように。」

「アヅマの山より高く？ そのような大それたもの、果たして築く技がありますでしょうか。」

「心配には及ばぬ。土師部の者どもによれば、適わぬことではないと申しておった。」

「なんと、吾ら大伴部を差し置いて。」

「出来もせぬことを、その方らに無理強いする訳にもいかぬであろう。」

早くも傾き始めた陽射し照らされたコワクビに、木枯らしのような姫の言葉が返されました。

「恐れ入ります。しかし、それほどのものを築くとなると、このイニハの国中の男を集めませんとなりませんな。」

「いや、ハブの者のみで成しとげよ。」

「吾らだけで、そのような大それたものを築けと仰せか。」

身を乗り出して語気を荒げたコワクビに対して、姫は変わらぬ口調で告げました。

「民草（たみくさ）の間では、ハブの大伴部がイニハの国を奪わんとしている、との噂があるそ

うじゃな。その方らの父祖が企てたように。」

「それは」

「もちろんそのようなこと、真に受けてはおらぬ。しかし、民の心の波立つことを捨て置くこともできぬ。そうであろう、ハブの大半部。」

「仰せの通りでございます。」

「さればじゃ。吾が父の奥都城を大いなるものとすることで、その方らに二心（ふたごころ）なきことを吾が民に示すことが出来よう。」

返す言葉を探すコワクビに向かって姫が言葉を継ごうとしたとき、それまで父の傍らで控えていたマヨサが口を開きました。

「民は、新たな年の実りが乏しくなることをこそ、憂いております。」

「おお、イツコリの神を投げた者よ。その方の口からそれを聞くとは。」

初めてヒツキ姫の声に楽しげな響きがまざったように聞こえました。

「その方の申す通りじゃ。イツコリの神が、あれほど見事に投げられたのだから、皆が怖れるのも致し方のないことであろう。」

「姫は、俺がイツコリの神を投げたことが災いを招く、そうお考えか？」

マヨサが正面から姫と相対するのは素舞の会の日以来二度目のことでしたが、あの日は独り素舞に心を集めていたため、その清楚な顔立ちといかにも気丈そうな瞳を見るのは初めてです。

「控えよ、マヨサ。」

「良い。」

慌てるコワクビを制して、ヒツキ姫がマヨサに応えました。

「独り素舞は次の秋の実りを占うもの。次の作柄がどのようになると、その方に罪はない。」

「さすがは姫様、賢くてあらせられる。ならば話が早い。」

「マヨサ、いい加減せよ。」

「良いと言っておる。」

姫は再びコワクビを制しました。

「それで、何を申したいのです？ 己の身が穢れなきことを認めて欲しい、そう言いたい訳ではないでしょう。」

高みからの物言いであることには変わりありませんが、同じ年頃のマヨサの口調につられたのか、ヒツキ姫の言葉も知らず知らずのうちにくだけたものになっています。

「次の春と夏は、秋の実りをもたらす雨が足りなくなるやも知れませぬ。あるいは、陽射しが足りなくなるやも知れませぬ。どのような災いに見舞われるかは判りませぬが、備えられるものは備えたいのです。」

「吾が父の奥都城など作ってはおられぬ、そう申すか。」

「いえ、そうではありません。アヅマの山ほどの奥都城を築くとなれば、それに用いる土を掘り起こさねばなりません。どうせ掘り起こすのであれば、そこを溜め池として作ることをお許しいただきたいのです。ナガの池だけでは足りなくなるかも知れませんから。」

ヒツキ姫はしばらくの間、息子の思いもよらぬ申しよう戸惑うコワクビと、畏れの色が全く見えないマヨサとを見くらべていましたが、やがて口を開くと言いました。

「マヨサ。その方の願い、聞き届けましょう。しかし、さらに大がかりなものとなるが、大伴部の者共にその技はあるのですか。」

「もとよりありません。しかしそれは、奥都城を築くだけであっても同じこと。」

マヨサは笑いました。

「では、どのようにするのです。」

「土師部の者たちを雇います。」

「勝手なことを申すな。」

コワクビが咄嗟に口を挟みました。

「しかしお館様、そうしなければアヅマの山ほどの奥都城など、築きようがないではありませんか。それとも、この場でお断りするのですか。」

マヨサの答えに、コワクビはヤマトへ出向いているソワヒコが言い残したことを思い出しました。

『くれぐれも国造を奉られ・・・』

今ここで国造の姫に逆らえば、全ては台無しになってしまいます。

「それに」

黙るコワクビに向かって、マヨサはさらに言いました。

「溜め池は、あの者らにとっての備えでもあるのです。ややこしいことを言い出して、吾らを煩わすこともないかと存じます。」

しばらくの間があった後、ヒツキ姫がコワクビに向かって言いました。

「では、亡き国造に代わり、改めてバブの大伴部に申し付ける。アヅマの山を凌ぐ大きさの奥都城と日照りへの備えとしての溜め池、その二つを作ること。」

そして静かに立ちあがりながら、マヨサに聞こえるように、そして楽しげにつぶやきました。

「ハブの大伴部が吾が大壬生部より政を奪おうとしているとの噂、あながち的の外れたものではないかもしれませんね。気をつけなくては。」

## 謀（はかりごと）

---

明くる日、コワクビは大伴部と土師部の主だった者を郡衙の政の館に集め、国造の奥都城をトッカの江の一番奥の高台に築くことを決めました。そこは、ハブの郡衙から東南にそれほど離れていない場所であり、そこにアツマの山を凌ぐ大きさをイニハの国造の奥都城がそびえれば、いかにもハブの大伴部は国造を奉っていることを表すことになるでしょう。

「吾らの力を削ぎ、その力をもって己を誇るためにしようという腹づもり。見え透いておるわ。」

その日の夕方、ハブの郡衙の政の館の裏手にある奥館で、コワクビはそう毒づきながら杯（さかずき）を一気に干しました。

「いまは身罷られた国造の殯（もがり）のさなか。慎まれた方がよろしいではありませんか。」

マヨサの母が不安げな面持ちで諫めながら、次の酒を杯へ注ぎ足しました。

「あの姫君のことだ、奥都城を築き終えるまで殯も終わらぬと言うのだろう。あれほどの大きさの奥都城、作り終えるまでどれだけの時がかかると言うておる。それまで一切ハレのものを口にするとと言われても、この身が持たぬわ。」

「しかし、身罷られてまだ間もなきことゆえ。」

「いずれ破るのであれば、いつ破っても同じこと。それにだ、此度（こたび）のことは吾がハブの大伴部にとっては慶び事へと転がる、その兆しでもあると思わぬか。じきにそなたの弟、ソワヒコがヤマトより良き報せをもたらしてくれよう。大王よりマヨサと大壬生部の姫との縁組みをお認めいただければ、吾が大伴部がイニハの国の国造。結局のところあの奥都城は吾が大伴部のものであり、イニハの国における吾らの力の標（しるし）となるう。」

妻に向かって空になった杯を再び差し出しながら、コワクビは笑いました。

「そのこと、マヨサは存じているのですか。」

「いや、まだ話してはおらぬ。彼奴（あやつ）は政を嫌っているのな。しかし此度のことで吾は彼奴を見直した。奥都城を築くことと引き換えに、民のための溜め池を作ることを申し出るとは、なかなか頭が回ることよ。いまも土師部の郷に出向き、よろずの事を練っておる。」

雪雲に覆われた空のような憂いの色を浮かべ、まるで幼いわが子を抱くようにして酒瓶を抱えるマヨサの母を尻目に、コワクビは上機嫌で三杯目の酒を飲み干しました。



しかし、そのときマヨサは土師部の郷にはいませんでした。セヲの小屋で、セヲの父や土師部の長と話をしていたのです。セヲの母とセヲも一緒に互いの身を寄せあうようにして座る小屋の中は、外の寒さを忘れてしまう程でした。

「あの場所に山のような奥都城がそびえたら、ここからの景色もだいぶ変わりそうだね。」  
「セヲはのんきで良い。俺には、果たしてそれが出来るものかすら、わからん。」

気軽な口ぶりのセヲに対して、これからどのようにして事が運んでいくのか全く思いもつかないという顔を向けるマヨサに、彼の真向かいに座った土師部の長が話し始めました。

「まずは、奥都城を築く場所に生えておる木を切り払わねばならぬ。アヅマの山を超えるほどの大きさとなれば、そうさな、幅は四十歩ほどの長さとなろう。さらにその周りもきれいに切り拓くとなると、それだけでも大仕事だ。」

「あの場を切り拓く仕事は、吾ら大伴部が受け持ちましょう。しかし、アヅマの山よりも大きな奥都城など、真（まこと）に作る事が出来るのですか。」

今さらのこととは承知の上で、マヨサはやはりそのことを聞かずにいられませんでした。

「正直なところ、吾にもわからぬ。何しろそのようなものは作った事がないのでな。だが、何とかなるだろう。」

土師部の長は隣のセヲの父のほうを向きながら、笑って答えました。

「ああ、何とかなる。幼い頃にアヅマの山を築くところを見ておったからな。」

セヲの父が楽しげにそう言うと、マヨサは思わず大きな声をあげました。

「なんと。父御殿はいったいおいくつなのですか？」

「なにをそんなに驚いておるのじゃ。」

「アヅマ山は、ヤマトタケルの命が築かれたと聞いておりますので。」

「ああ、そうであったな。それはその通りじゃ。」

「ということは、父御殿はやはり・・・」

「あっははは、そんな馬鹿なことがあるか。あの山はな、そなたの父の前の前の代の大伴部の長が、先祖より語り継いだ小塚の上に己の奥都城として築いたものじゃ。だから、もとをたどればそなたの聞いておる話が偽りというわけでもなかろうが、あの山をあれほど大きく築いたのは儂の親父たちじゃ。」

「なるほど、そういうことですか。」

マヨサは、マカタの館での国造の姫が父に向かって話したことを思い出し、あまり知りたくはなかったことを知ってしまった、という顔になりました。

その一方で、皺の中に落ち窪んだ父の瞳がいつにもましてきらきらと輝いているのを、セヲは見てとりました。そしてその瞳には、これから築こうとしている大きな奥都城の姿がはっきりと浮かんでいるようでした。

「吾らが作る奥都城は、吾ら土師部が祖先より受け継いだ形で作らせてもらうが、良いか。」  
「出来るのであれば、形などどのようなものでも良いと思います。」

マヨサの答えは少し投げやりにも聞こえましたが、そのようなことにはお構いなしでセヲの父は話を続けました。

「奥都城は三段じゃ。そなたが独り素舞を舞った、あの四角い土舞台があろう。あれの大きなものをこしらえ、それを三つ重ねて山となす。」

「三つ重ねるとは？」

「始めに、広い土舞台を築く。その上に、一回り小さな土舞台を重ね、さらにその上により狭い土舞台を乗せるとするよ。」

マヨサは折り重なるように炉に焼（く）べられた薪の燃える炎のなかに、これから作られる奥都城の姿を思い浮かべました。

「そのよう勇ましげな奥都城がそびえるとなれば、カトリの江のこちら側だけでなく、イニハの浦からも望むことが出来そうだ。」

その幻に思わず心を踊るのを感じたマヨサでしたが、その横で今度はセヲがまじめな顔つきでつぶやきました。

「でも、よほど堅く土を固めなければ、崩れたり潰れたりしてしまうんじゃないかな？」  
「さて、おまえならどうする。」

炉の向こう側から土師部の長が問いかけると、セヲはしばらく考えた後で、ある閃きを得たように口を開きました。

「土を焼き固めた塊を作って、それを積み重ねていくというのはどうですか。それなら、どんなに大きな奥都城でも出来そうだ。」

「土を焼き固めて組み上げるか。それは面白い工夫だな。」

土師部の長は感心した顔でセヲの父を見ました。セヲの父も、息子の考えを楽しむように微笑んでいます。

「だが、それでは手間がかかりすぎる。土の塊を焼くための大きな窯も作らねばならぬであろうし、多くの薪も集めねばならぬ。」

土師部の長は、セヲの考えが活かせるわけを残念そうに話しました。

「だがその工夫、いずれ必ず活かされる時があるであろう。忘れるなよ、セヲ。」

「ありがとう。でも、僕のやり方では駄目なら、一体どうするのですか。」

「幾重（いくえ）にも垣を作る。」

「垣？」

セヲとマヨサは、炉の炎から立ち上る煙越しに土師部の長の顔を覗き込みました。

「そうだ。奥都城を築く場所を平らに均（なら）し、伐り払った木を使って外側には人の背丈ほどの垣を、内側に行くほど高い垣を幾重にも巡らせる。そして垣と垣の間に、枯れ草や藁屑を混ぜた土を埋め込んでいく。その後、全体を土で覆い固めて一の段とし、さらにその上に同じ事を繰り返すというわけだ。」

「なるほど、そのようにすれば確かに出来そうだ。」

小屋を葺いている小枝を数本引き抜いて、小さな垣を作ってみながら長の言葉を確認するセヲの手もとを見ながら、マヨサは別の、そしてより大きな気がかりを口にしました。

「そのやり方にしてもだいぶ人手と時がかかりそうだ。溜め池を作る人手は足りるのだろうか。」

「そう、溜め池こそが農らの願いじゃ。」

セヲの父は強い調子でそう言うと、茹でた蓮の実を一粒口に含んで続けました。

「奥都城を築く高台の西の裏手を少し下ったところに、長い谷津があろう。あの泥の谷津には多くの絞り水の脈が入り込んでおる。あそこの泥を浚って土を掘り出し、谷津の北の縁（へり）から西のカトリの海や東のトッカの江へと流れ出している水の道を見つけて閉ざせば、豊かな溜め池となるはずじゃ。」

土師部の長は頷くと、ドクダミの茶の注がれた碗をセオの母から受け取りながら言いました。

「奥都城が出来るまでに少なくとも二年はかかるであろうが、池はそれなりの大きさのものを春

までに掘らねば意味がない。吾ら土師部はまず、谷津の泥を浚う。その泥を詰める麻袋を集めたいのだが、服部の者どもへ義姉さまから話をつけてもらえぬだろうか。」

「お任せください。」

「農らのようなはぐれ者がおると、こういう時に役に立つじゃろう。」

セヲの母と父が静かに笑うと、土師部の長も笑いながらマヨサの方に向き直って言いました。

「では、明日の朝から取りかかるとしよう。大伴部の長の息子よ、そちらの手はずは任せたぞ。」

マヨサは黙ったまま深く頷くと、腰を上げて小屋の外へと出ました。戸口のそばでは、マカミが行儀よく座って主人を出迎えています。トツカの江の向こうを眺めると、高台にこんもりと茂る林を縁（ふち）取るように滲む橙色の夕空が、見る見るうちに紫に変わっていきます。年が明ける頃にはこの景色も無くなっているのです。そして何年か後には・・・。

あとから出て来たセヲに渡された、小屋のなかに置き忘れた外套を羽織りながら、マヨサは不思議な気持ちでマカミの背中をひと撫でしました。

## 工事の始まり

---

次の朝、マヨサは大伴部の男たちを率いて、奥都城を築く場所へとやってきました。男たちの手には薄く研ぎすまされた石斧が握られています。なかには鉄で出来た斧を持っている者もあります。マヨサは鉄斧を持った者に幹の太い木を、石斧を使う者には細めの木を割り当て、それぞれに仕事の段取りを話し始めました。

一方、土師部の長は自らの部の民を西の谷津に集めていました。

「あの辺りに杭を並べて打ち込んで堰とし、流れ込む絞り水を向こうへ回す。そして、あの辺りにもうひとつの堰を作って、堰と堰の間の泥を浚って深く掘る。」

集まった男たちや女たちが長の話をしているあいだ、セヲは朝の冷え込みで表面が凍った泥の上を歩きながら、これから行なわれる仕事の流れを思い描いていました。

「まず始めに葦を刈り払わなくちゃな。刈った葦は奥都城を築く泥に混ぜて使うから、どこかに集めておく場所も作らなきゃならないか。そうだ、浚った泥と混ぜ合わせて、麻袋につめておく方が良いかもしれないぞ。」

やがて、土師部の者たちはいくつかの集まりに別れ、それぞれが受け持つ仕事についての打ち合わせを始めました。土師部の長はその場を離れると、アユキと一緒にうろうろと歩き回っているセヲのそばにやってきて声をかけました。

「おまえは土師部者ではないのだから、仕事に加わらなくとも良いのだぞ。」

「僕が加わったところで、物の数に入らないでしょうからね。」

そう笑うセヲに土師部の長は真面目な顔で答えました。

「そんなことはない。おまえの犬はともかく、おまえには土師部の大人の仕事を任せられるだろう。しかし」

いつものように尻尾を回してじゃれついて来るアユキを手で押しのけながら、土師部の長は穏やかに続けました。

「おまえは全てを見ておけ。あのミサゴのように。」

セヲが見上げると、白と茶の鮮やかな羽を大きく広げたミサゴが、冬の澄んだ空を東へとゆっくりと滑っていきます。その姿が高台の林の陰に隠れそうになったとき、そちらの方からたくさんの斧が一斉に木を叩く音が響き始めました。

「さて、こちらも始めるとしよう。」

土師部の長はセヲの肩をポンと叩くと、仕事に取りかかる用意の整った自分の部の者たちのところへゆっくりと戻って行きました。

## それぞれの力

---

それからというもの、ハブの大伴部の郷の周りには毎日木を伐り倒す音が響きわたり、土師部の者たちはその音を聞きながら谷津の泥を掘り続けました。長い谷津の四分の一ほどの広さの泥が浚われ、大人の胸ほどの深さの穴が掘られた頃、暦の上では新しい年が始まりました。しかし、そのことを慶ぶ者は誰もおりません。さらにひと月ほど経った後、次に掘られた穴と始めの穴を仕切っていた堰が取り除かれる時になって、ようやく土師部の者たちの間に安堵の色が広がりました。

「あと半分じゃな。」

溜め池作りの様子を眺めに来たセオの父が、傍らに立つ土師部の長に言いました。

「ああ、あと半分だ。しかし、これまで掘った穴だけでも、無いよりは遥かにましだ。ほら、もう絞り水が溜まり始めている。」

「奥都城の方はどんな按配になっておるのじゃ？」

「あらかた伐り倒し終えておるが、根を掘り返すのに難儀をしているようだ。」

「そうか。」

「全ての根を取り除かないとしても、八重垣を巡らす場所にあたる株はどかさねばならぬから厄介だ。」

「まあ、うまく切株を除けたとしても、土師部の者がこちらに掛かり切りである間は、仕事を進めるわけにはいかぬのじゃから、慌てることもあるまい。」

「それはそうなのだが、こちらも浚った泥のやり場に困り始めてな。はやく奥都城の垣を作り始めねば、ここに泥の山が出来てしまう。」

土師部の長は、掘られた池の縁（へり）のあちらこちらに積み上げられた泥を見やると、苦笑いを浮かべました。

「ところで、セヲは来ておらぬか？」

「今日は姿を見ていないな。昨日は、大伴部の息子とともにやって来て、泥をつめた麻袋をいくつか運んでいったが。」

「そうか。では、あちらの様子も覗いてくるとしよう。」

セヲの父はそう言って谷津を後にすると、大伴部者たちが働いている高台へと向かう、昨晚のうちに降った雪で少しぬかるんだ細い坂道をゆっくりと歩いていきました。木枯らしに乗って雑木林を抜けて聞こえて来る斧を振るう音は、前に比べるとだいぶ疎（まばら）らになっていましたが、坂を上るにつれて人々が騒がしく動き回る声が大きくなってきます。

坂を上り切って少し歩くと、そこにはイニハの国の全てが見晴らせるのではと思うほどに明るく

開かれた場所が広がっていました。

「ずいぶんとさっぱりしたな。」

セヲの父は、忙しく働く大伴部の者たちから少し離れたところで、低く積み重ねられた麻の土袋に腰掛けたセヲを見つけると、近づいて声をかけました。

「大伴部の者たちには慣れぬ仕事なのに、よく捗（はかど）っておるではないか。」

「マヨサは仕事の運び方がうまいし、皆とも見事に息が合っていますから。」

「実は政（まつりごと）に向いておるのかもしれぬな、あの者は。」

そう言いながらセヲの父は、切り拓かれた土地のあちらこちらに残る切株を掘り起こそうと、挺にした棒に身体の重さを預けて思い切り踏ん張っている男たちのなかにマヨサの姿を探しました。

「姿が見えぬな。」

「朝のうちに、大伴部の長に呼ばれて郡衙へ行きました。」

「そうか。ところで、おまえは何をしておる？」

父の問いかけを待ち構えていたかのように、セヲは土袋から腰を上げると足もとの切株を指して言いました。

「みな、この切株に手を焼いているんです。」

「確かに骨の折れる仕事じゃ。」

「マヨサは、土師部には何か技があるのではないか、そう言っています。」

「あるにはあるが、これほどの数じゃからのう。儂ならすぐに諦める。」

そう言ってセヲの父が高笑いすると、木の根と格闘していた男たちの何人かがこちらを振り向きましたが、それがときどき現われる翁であることがわかると、また自分の仕事を続けました。

「僕は、せっかくしっかりと根を張っている切株にも、奥都城を支えてもらえばいいと思うんです。ちょっとそっちの端を持ってもらえますか。」

セヲはそう言いながら一本の細い丸太の端を持つと、切株とその脇に積んだ泥が詰まった麻袋の上に置きました。

「こんなふうには、同じ高さに切り揃えた切株に丸太を渡して、垣を作れば良いと思いませんか。」



切株の高さの分だけ空いてしまう丸太と地面の間は、この泥を詰めた麻袋で埋めればいい。垣と垣の間の切株は、そのまま泥のなかに埋めてしまっても構わないはずだし。」

セヲの父は黙ったままで、嬉しそうに息子の話を聞いています。

「もしこれで良いなら、掘り起こす木の根は棺を納める石の部屋の場所と奥都城の周りだけで済みます。」

「良い思いつきじゃな。後で下に降りて行って、明日から土師部の者をこちらに回すように言うでしょう。」

「やっぱり、父さんには判っていたのですか？ こうすれば良いことが。」

「こうしておまえが思いついたこと、それが何より大切なことじゃ。あの水甕運びの仕掛けのように。」

「じゃあ、こちらで切り出した丸太を下に降ろすときの重さで、泥をこちらに運び上げる仕組みも土師部の人たちは知っているんだ、やっぱり。」

そう言うとその場にしゃがみ込み、落ちていた木切れで地面に線を描き始めた息子の顔を覗き込むようにして、父が尋ねました。

「つまらぬか？」

「とんでもない。僕の考えた仕掛けとどこが同じでどこが違うのか、それを確かめられるのですからわくわくしますよ。」

「そうじゃろうて。儂らのような者には、人が作ったものを使うだけ、ということほどつまらぬことはないからな。」

セヲの父がセヲの隣に腰を下ろして、自分でも絵を描き始めようと小枝を探し始めたとき、二人の背中に声をかける者がありました。

「二人してそんなところに座り込まれては困りますよ。ほかの者の邪魔になる。」

それは、わざとらしく困った顔をしてみせたマヨサでした。

「これはこれは、大伴部の長の息子殿。申し訳ないことをした。」

セヲの父も笑いながら丁寧すぎる答えを返しましたが、立ちあがる素振りは見せません。マヨサもごく当たり前のように、二人のそばにしゃがみ込みました。

「大伴部の長殿から、奥都城造りのことで何か言われたのか？」

「いえ、奥都城のことも溜め池のことも、取り立てて何も言われてはおりません。」

「そうか。」

セヲの父は満足そうに小さくうなずきました。

マヨサは、木切れで地面に線を引いているセヲに向かって声をかけました。

「忙しいか、セヲ。」

「まあね。」

「今からちょっと付き合わぬか。」

「今から？」

「ああ、今からだ。」

「どこへ。」

セヲは手を止めることなく、気のない答えを繰り返しています。

「蘇我の姫のところだ。」

「蘇我の姫？」

「前に誘ったことがあったろう。ほら、黄金（こがね）の人形（ひとがた）があるところだ。」

黄金の人形という言葉に、セヲは線を引く枝を止めました。

「ああ、あのときはほかの客があるからって、行くのをやめたんだっけな。」

「そうだ。俺もあれきりとなっていたのだが、お館様より使いを申し付けられてこれから参るのだ。どうだい、一緒に行かぬか。」

「行って参れ、セヲ。」

二人のやり取りを聞いていたセヲの父が口を挟みました。

「父さんは見たことがあるのですか、黄金の人形を。」

「ああ、おまえの母と訪ねたことがある。」

「母さんも？ でも、その姫のもとを訪ねることは禁じられているのでは？」

セヲはマヨサと顔を見合わせました。

「儂らのようなはぐれ者は気ままに動けるのがありがたい。」

セヲの父はそう言って笑うと、真顔に戻って続けました。

「おまえにもいつか見せたいと思うておったが、マヨサ殿が連れて行って下さるのならばちょう

どよい。」

「父さんがそう言うのなら。」

セヲは手にした枝を地面に置くと、ゆっくりと立ちあがり、尻についた土を手ではらい落としました。

「では行って参ります。日が暮れるまでには帰ると、母さんに伝えて下さい。」

「ああ、わかった。マツ姫さまに、藪の翁からよろしくと伝えておくれ。」

セヲの父はしゃがんだままの姿で若い二人を見送ると、セヲが残していった枝を拾い上げ、自分の頭の中に浮かんでいる絵を地面に写し始めました。

## 初めて見るもの

---

マツ姫の庵は、アツマの山の北側に広がる竹林を抜けたところに、ひっそりと建っていました。庵と言ってもセヲたち親子が住む掘建て小屋とは違い、地面から離れた場所に床が張られ、四方には白木の壁が廻らされていましたが、ヤマトの大臣（おおおみ）と縁ある姫の住いにしてはやはり粗末なものでした。

「お館様の御用を済ませてしまうまで、しばらく外で待っていてくれ。」

そう言うと、マヨサは庵の扉の前に吊るされた鐘を叩きました。浅く扉が開き、その陰から覗いた侍女とおぼしき女がマヨサを認めると、彼をなかへと招き入れました。

ひとりになったセヲが庵の周りをゆっくりと巡って裏手に回ると、庵から少し離れた日だまりに、小さな岩で囲まれた狭い畑を見つけました。そこには、細い緑の剣のような葉が何枚もまとまった株がひとつ植えられてあり、その先には真ん中に黄色い筒のようなものをつけた白い花が咲いています。

「冬に花をつける草……。」

セヲは畑の横にしゃがみ込むと、葉を触ったり花を嗅いだりしてみました。そして、葉の先を摘んでちぎると、指先で擦り潰して匂いを嗅いぎながらつぶやきました。

「ニラに似ているけど、匂いがない。この草は食べられるのかな。」

「いえ、それは食べられません。」

背中から不意に聞こえた優しい声に、セヲが慌てて立ちあがって振り向くと、そこにはマツ姫の微笑む顔がありました。しかしセヲは、自分の顔が怖れのために引きつっているのを感じていました。たったいま聞こえた柔らかで親しげな声と、穏やかで暖かな眼差しは、今まで出会ったことのないほどの優しさでセヲを包んでいるのに、龍の鱗のようにひび割れた肌のところどころに腫物が出来ている姫の顔を見ると、自分の心とは別の何かが身体を強ばらせてしまっているのです。

「おどろかせてしまっておめんなさい、セヲ殿。」

セヲはなぜ自分が謝られたのかわかりませんでした。自分の方こそ詫びたい気持ちで一杯なのです。それなのに声すら出せないでいることに、セヲは激しく戸惑っていました。そんなセヲの様子を案じるように、そして心なしか悲しげな瞳でマツ姫がふたたび口を開きました。

「はじめてお会いする方は皆そうなのです。」

「いや、俺はそうではなかったはずですが。」

マツ姫の後ろに立っていたマヨサが、すこし戯けるような調子で口を挟みました。

「あら、あれほどあからさまに顔をしかめたお方が、なにを言うのでしょうか。」

「そうでしたか？」

「そうですよ。」

そう言って笑い合うマツ姫とマヨサは、まるで幼い頃からの友のように見えます。やがてセヲの方に向き直ったマヨサは、目では笑いながら、わざと強い口調で言いました。

「マツ姫に謝れ。」

「えっ？」

「姫の大切な薬となる草を、勝手にちぎったことを謝れ。」

そうマヨサに言われたセヲは、胸の奥に閉じ込められていた言葉が、ようやく喉を昇って来るのを感じました。

「お許してください、マツ姫さま。」

「気にすることはありません。はじめてのものは、見るだけではわかりませんものね。」

マツ姫は白い花をつけた草の側に腰を下ろすと、その細い葉を撫でながら話し始めました。

「この草は水仙。私の肌の病を癒す草なのです。父が外（と）つ国より渡らせて下さった根を、ヤマトより持って参りました。殖せぬものかといくつか植えてみましたが、芽を出したのはこのひとつだけ。」

「葉を煎じて飲むのですか？」

セヲは、ちぎった葉をもみ潰したて青くなった指先を隠すように、そっと掌を握りました。

「いいえ。根をすり潰した粉を麻の実の粉と合わせて溶き、それを麻の布にのぼして肌を覆うのです。このハブの地の麻が良い品であることはアスカの都でも広く知られておりますが、あなたの母上さまがお持ちくださる布は、殊のほか私の肌を癒してくれます。」

「母さんが姫に麻布を？」

セヲはそのことにも驚きましたが、それよりも姫と素直に話をしている自分にも驚き、そして安堵しました。

「ええ。あなたの母上はとてもお優しい方。それに、この地の草木についてとても詳しくておい  
です。この水仙とは別の、私の病に効く草を教えてくださいました。」

「母さんは、もともと服部（はとりべ）の者ですから。」

「お聞きしています。セヲ殿の父上様のことも、そしてあなたのことも。」

「あの母さんが？」

セヲの家では父が主に語り部であり、母はそれを笑いながら聞いているのが常のことです。で  
すからセヲには、マツ姫に向かって家族のことを語って聞かせる母の姿を、にわかには思い浮か  
べることが出来ませんでした。

そんなセヲを横目に見ながら、マヨサがからかうように口をはさみました。

「セヲのことは何と？」

「僕のことはいいじゃないか。」

その声にセヲの心が曇るのを見てとったマツ姫は、静かに立ちあがるとマヨサに向かって答え  
ました。

「たいそう慈しんでおられるご様子でした。でもそれは、マヨサ殿の母君とて同じこと。」

「母上は案じすぎなのです。このところの母上は疎ましくすらある。」

「そう思える内が花なのかもしれませぬ。さて、マヨサ殿。今日は薬師如来様を拝んで頂くため  
にセヲ殿を連れて参ったのでしょうか？」

「そうそう。セヲ、こんなところに突っ立っている場合ではないぞ。黄金（こがね）の人形（ひ  
とがた）をともに拝ませて頂こう。」

そう言って庵の方へと歩いていくマヨサの背中を見ながら、マツ姫は隣に立つセヲに小さな声  
で話しました。

「あなたの母上様は、赤子を背に負うた白い鹿と出会った時のことをお話しになるのがお好きで  
すよ。」

「その話、僕はあまり好きじゃないんです。」

「どうして？」

「父さんや母さんの子ではないことを思い出すから。」

「そうですか。それはごめんなさいね。」

「姫さまは謝らないでください。自分はどこから来たのかなんて、知らなくても良いことを知りた  
くなる僕が悪いのですから。」

「悪いものですか。この世の縁（えにし）は始めも終わりもなくつながっていくもの。どちらに  
向かって辿るのも、今の縁を蔑ろにすることにはなりません。」

セヲは、今まで誰にも明かしたことの無い胸の内を、出会ったばかりのマツ姫に何のためらいもなく明かしている自分が不思議でした。そして、それよりもなお不思議なのは、初めてマツ姫を見た時にあれほど感じていた怖れがすっかり消えているどころか、心安ささえ感じていることです。

「姫さまは」

セヲがそう言いかけたとき、庵の戸口に立ったマヨサがしびれを切らしたような声で二人に呼びかけました。

「セヲ、ヤマトの輝きを見たくはないのか。姫さまもはやく中へお入りにならないと、お身体に障りますよ。」

マツ虫はマヨサに向かって軽く会釈をすると、セヲを促して言いました。

「さあ、参りましょう。ゆっくりと御仏のお姿をご覧ください。」

「これは・・・」

黄金に彩られた薬師如来を目の当たりにして、セヲは息をのみました。彼が今まで見たこともなければ、思い描いたこともない眩さです。その色をあえて例えれば、秋に実る稲穂の色か春の終わりを告げる山吹、あるいは先ほど見た水仙の白い花の真ん中で映える黄色のようですが、そのどれでもあるようでもあり、どれでもないようでもあります。そして、何よりセヲの心をとらえたのは、そのふくよかな姿と穏やかな表情でした。それは人の姿を写したようでありながら、この世のどこを探してもこのような人は見つからないようにも思えます。

「どうだい、セヲ。これほどの人形を作る人々が暮らすヤマトという国、訪ねてみたいと思うだろう。」

黙ったままで薬師如来を見つめているセヲにしびれを切らしたマヨサが、まるで自分の手柄を誇るようにそう水を向けると、セヲが静かに口を開いて言いました。

「これは人の形ではないよ。」

「何を言う。おまえが作る変わった姿の人形よりも、はるかに人の姿を写しているではないか。俺は初めて見たとき、生きた人が座っているのかと思ったほどだぞ。」

「ああ、マヨサの言う通りだね。でも人じゃない。」

マヨサは、セヲの言っていることが分りませんでした。しかし、この場で問いつめたところでそれが分るわけでもないことは、これまでの付き合いでよく知っていました。再び口を閉じて薬師如来を見つめ続けるセヲに話しかけるのをやめたマヨサは、庵の隅の間に座って二人の様子を伺っていたマツ姫のそばへと移りました。

「あいつの心の内は、傍目には分りにくい。」

「そんなことはありませんよ。」

「姫は人の心を知ることには長けておいでですからね。」

「マヨサ殿は殊に知られやすいお方。」

そう言ってマツ姫が笑いました。

「大伴部のお館さまが気を揉んでおいでのことも、あなたは何も知らぬ振りをし通したいのでしよう。」

「政（まつりごと）のことは何もわかりませぬ。」

「そうして惚（とぼ）けていられるのも、都で私の叔父と計らっておいでのソワヒコ殿が戻られ



るまでのこと。」

「これほど時が過ぎてもソワヒコが戻らぬところを見ると、うまく事が運んでおらぬのかもしれませんが。そうであれば、俺は何も知らぬまま。」

「都からの知らせも滞っているとはいえ、いずれ事の次第が伝わって参りましょう。」

「このままソワヒコからの音沙汰がなければ、今年の秋に俺が都へ上って直に確かめて参ります。くれぐれも、大臣殿を急かされませぬよう。」

「私に大伴部のお館さまに嘘をつけと？」

「いえ、そうは申しておりませんが。」

「この世の事は全て、なるようにしかならぬもの。」

二人は互いの顔を見合わせると、相変わらず薬師如来と向き合い続けるセヲを見遣りました。それはまるで、瘡王（くさのおう）の黄色い花にとまるコツバメのように見えました。

## 災いの始まり

---

それから数ヶ月の間、イニハの国には大きな災いはありませんでした。

冬が終わって弥生の頃になると、広く耕された畑一面に播かれた麻が芽を出し、それをついばみに集まるカワラヒワを追い立てる子供たちの声が、朝から夕暮れまで聞こえていました。

いつもの冬よりも多く降った雪と春になっても雨の日が多かったせいで、国造の奥都城は一番下の段の八重垣をなかなか埋め終えられずにいましたが、そのかわりに陸稲の背丈も伸び始めた五月ともなると、溜め池にはたくさんの絞り水が集まり、南の国から戻って来たツバメたちの水場になっていました。

しかし、ハブの人々の多くが「マヨサが独り素舞で占ったことは外れたのだ」と思い始めたこの頃から、空の様子がおかしくなってきました。いつもの年であればとっくに梅雨に入ってよい頃なのに、まったく雨が降らないのです。

そして、水無月になっても雨のない日が続くなか、人々は日照りへの怖れを再び抱き始めました。

「お館様。土師部の者どもより、溜め池の堰を切ることを求められております。」

政の館で、マヨサはコワクビと向き合っていました。

「もうかれこれひと月も雨がありませぬゆえ、このような日和が続けば、陸稲の出来はいつもの年のようにはならぬと、民草は憂いております。」

「そう先案じする事もない。」

ぶっきらぼうな答えとは裏腹に、コワクビの顔には明るい色が浮かんでいます。

「こここのところの日和のお陰で、奥都城の土も堅く乾いているようではないか。」

「それだけ、田畑も乾いているのです。」

「なあに、じきに雨が降る。いま慌てることはない。」

「しかし」

「堰を開くには国造の許しを得なければならぬ。もしいま池の堰を開き、そのすぐあとに雨が降ったなら如何する。政とはな、事を為すべき時を知らねばならぬ。民の言うがままを為す事ではないぞ。」

「その時がいまでであると申し上げているのです。いま堰を開かず稲を枯らすなら、溜め池を掘った甲斐が無いではありませんか。」

「マヨサよ、独り素舞でイツコリの神を投げたおまえが気を揉むのはわかる。しかし案ずるな。このハブに災いは来ぬ。独り素舞など形だけの習わしに過ぎぬのだ。」

食い下がるマヨサを持って余すように、その座から立ちあがったコワクビはマヨサに背を向け

ると、乾いた陽の光が差し込む明かり取りから青い空を見上げました。

「いずれ雨は降る。そして、稲穂が実る頃には、ソワヒコが良き報せを持って戻るはずだ。」

その言葉を聞いたマヨサの心は俄（にわか）にかき曇りました。

「叔父上は吾らのことなど忘れて、都に居着かれるつもりとばかり思っておりました。」

「確かに、これまで思いのほか月日を過ごしたが、それも致し方なかるう。急いては事を仕損じる、と言うからな。」

「稲が実る頃ということは、葉月ですか。」

「ああ。明日、外つ国より遣わされし者をもてなす宴のうちに、蘇我の大臣のお口添えにて大王よりお許しを賜る手はずとなったと、今朝ほど報せが届いた。さあ、吾らが事の成る時もいよいよぞ。」

マヨサはこれまで、父と叔父の計らいを察してはいても、あえて埒（らち）の外にいるように努めてきました。しかしこの期に及んでは肚を括るしかありません。大きく息を吸い込むと、マヨサは父に尋ねました。

「吾らが事とは？」

当のマヨサに未だ何も話してはいなかったことを思い出したのか、コワクビの背中では少し慌てたようにも見えますが、マヨサの方を向き直ると落ち着き払った声で答えました。

「おまえはまだ知らずとも良い。声に出すと事が破れるかもしれぬからな。おまえはこれまで通り、奥都城造りを進めておれ。」

コワクビはそう言うと、肩透かしを食らって返す言葉を見つけられずにいるマヨサを残して、奥の間へと去っていきました。

国造の奥都城造りが進められている高台に向かって、マヨサは不思議な気持ちを抱きながら歩いていました。父の言う「吾らが事」について、まだ知らぬままでいられるという安堵の一方で、少しでも早くその事が成り、溜め池の堰を開くことを国造の姫に直に求めたい願う思いもあるのです。

若い緑の林に響くウグイスの声も耳に入らぬ様子で歩く主人の傍らを、少し遅れてついていくマカミの尻尾も、心なしかいつもより萎(しお)れているように見えます。

「おおい、おおい。」

自分を呼ぶ声によやく気づいたマヨサが顔を上げると、広くどっしり築かれた奥都城の一段目の土台から突き出た、二段目、三段目を重ねるための垣を支える柱に猿のようによじのぼり、こちらに向かって手を振るセヲの姿がありました。白いアユキが黒いマカミを出迎えに、いつもと同じように大きく尻尾を回しながら一目散に駆けてきます。一段目の法面(のりめん)を整える仕事の指図をしていた土師部の長も、手を止めてマヨサが近づいて来るのを待ち構えています。

「どうだった、堰は開けるのかい？」

柱の上から降りて来たセヲが、急かすように尋ねました。

「雨を待て、と言われた。」

その答えに、土師部の長も険しい顔でマヨサを問いつめます。

「来るはずの梅雨が来ておらぬのだぞ。そなた、そのことをちゃんと話したのか？」

「もちろん話しました。しかし、お館様は譲られぬ。」

「吾がこれから行って、あらためて話してこよう。」

「土師部の長殿が話をされても、お館様は聞き入れられぬでしょう。もし、お館様が首を縦に振ったとしても、果たして国造の姫にお伺いを立てるかどうか。陰で日延べをするのが関の山。それよりも」

マヨサは自分が口にしようとしている事に驚いて口ごもりました。

「それより、何だ？」

「国造の姫に、俺が直(じか)に許しを求めた方がはやいような気がする。」

これまで、政に手を染めることを避けているとばかり思っていたマヨサの言葉に、土師部の長は驚きを隠さずに尋ねました。

「そなたが姫に？ 長ではない者の申し出を国造が聞き届けることなどなからう。」

「あの姫は、俺が溜め池を掘ることを申し出たとき、吾が父よりも物わかりが良かったのです。だから此度（こたび）もきっと」

そう話しながら、マヨサは自分の言葉には嘘がないことを感じていました。政には関わりたくはない、その気持ちは今だって変わりありません。しかし、自分が感じ、思い描くことをそのままに形にできないもどかしさのなかで、そうするための力が自分の近くにあるのなら、そして自分が使って良いのなら、それを使いたいと思うのも素直な気持ちなのです。

「マヨサの思うようにいくのかな。」

脇で聞いていたセヲが、自分の気持ちに戸惑うマヨサの目を覗き込むようにして言いました。土師部の長はマヨサの様子を思い詰めていると見たのか、今度は穏やかな声を掛けました。

「セヲの言う通りだ。そなたがそこまで急（せ）いたところで、この話はうまくは運ばぬであろう。」

「では、どうすれば良いと？」

「あと十日、あと十日だけ空の様子を見よう。十日が過ぎても雨がなければ、吾が国造の館に参る。」

「しかし、それは吾ら大伴部の務め。土師部の長殿が直々に出向かれれば、それこそ事がこじれるのではありませんか。」

「そなたにこのような事を申すのは憚られるのだが、国造のヒツキ姫様は大伴部の力を削ごうとなされておる。しからば、吾ら土師部とそなたら大伴部の力を秤にかける形を好まれるはず。もし吾が姫ならば、吾らの願いを聞き入れたうえで務めを果たさぬ大伴部を責める、という筋書を描くであろう。マヨサ殿の申されるように、話の分かるお方であるならなおのことだ。」

「しかし、そこまでして、もし堰を開いたすぐ後に雨が降ったなら？ 土師部が責められることになりましょう。」

奥都城を築くために力をあわせて動き回る土師部と大伴部の民たちを眺めながら、マヨサは口ごもった声で尋ねました。

「その時は、吾のこの首を差し出せば済むであろうさ。」

土師部の長は、土で汚れた巖つい左の掌で自分の襟首を撫でながら答えました。

「案ずるな。そなたの独り素舞により示された、オオクニヌシの徴は確かだ。それを疑い干乾しになる事はあっても、信じて首を取られる事などあろうはずがない。それよりマヨサ殿、そなたは大伴部が責められぬよう、おのれの務めを果たすことに心を配るほうが良いぞ。」

土師部の長はそう言うと、奥都城造りに励む民たちのなかへと戻って行きました。その背中を黙って見つめるマヨサに向かって、それまで二人のやり取りを聞いていたセヲが声をかけようとしたが、それを遮るようにマヨサが口を開きました。

「これからマツ姫様のところへ参るが、今日はおまえを誘わぬ。」

「いいよ。」

「悪く思うなよ。」

「思わないさ。」

セヲは笑って答えると、主人について歩き出したマカミに追いつがるアユキの首を抱えました。そして、マヨサの姿が見えなくなるまで、そのままで見送りました。

## 人形に託すもの

---

「その報せ、私のもとにも届きました。」

薬師如来の前に座って香を焚いていたマツ姫は、マヨサのほうに向き直ると、彼の目を穏やかに見つめました。

「しかし、その報せがヤマトを発ったのがひと月前。今日までの間にもものがとが変わっているかもしれません。」

マツ姫は、その言葉がマヨサへの気休めではなく、自ら素直にそう願う気持ちであると強く感じていました。全てはなるようにしかならぬと知りつつも、マヨサが国造の姫と縁を結ぶことを思うと胸が苦しくなるのです。

「ソワヒコ殿がご自分で国造の姫と縁組みをすれば良いのに。」

「あのソワヒコのこと、肚の中でそれを狙っていたとしても不思議はありません。しかし今となっては、この俺が一日でもはやく国造と縁を持ちたい。」

「どうして急にそのようなことを？」

怯えるような目でマツ姫はマヨサを見ました。しかし、開け放たれた扉の向こうの青い空を恨めしげに眺めるマヨサの目には、マツ姫の顔に浮かぶ切ない思いは映りませんでした。

「梅雨が来ぬせいです。溜め池の堰を開きたいのに、お館様がそれを国造に願い出て下さらぬ。でも国造の姫の夫となれば、父上に気兼ねせず堰を開く事が出来るはず。」

マヨサの心がヒツキ姫に向いているわけではないと知ったマツ姫は、胸のざわめきがほんの少しだけ静まるのを感じました。その一方で、自分がマヨサを見ているようには、マヨサは自分のことを見てはいないという哀しみが、からだ中に染み渡って行きます。

「田畑はそれほど乾いているのですか。」

「あと十日のうちに雨がなければ、何としても堰を開かねばなりません。」

「その時には、コワクビ殿もお聞き届けになるのではありませんか。」

「そうであってくればよいのですが。」

そう言うと、二人は押し黙ってしまいました。

香木を焚く煙と、庵を取り囲む竹林の葉がサワサワと擦れ合う音だけが、二人の周りに漂います。

「私はただ御仏を念ずるだけ。」

やがて、心を決めたようにそうつぶやいたマツ姫は、金色に輝く薬師如来の前へ進むと、うなりの止まぬ鐘を鎮めるように静かに手を合わせました。

---

そのころセヲは、自分の小屋に戻っていました。

そして、土を捏ねる水を汲むため、自分の水場へと降りていきました。セヲの水場も、注ぎ込む絞り水が涸れ始めたため、いつもの年の同じ頃よりも少し小さく見えます。水辺に一羽のセキレイが降り立ち、すぐそばまでセヲとアユキが近づいて来ているにも関わらず、ちょちょこと早足で歩き回っているのを見たセヲはつぶやきました。

「鳥なら飛べばいいのに。」

そして、アユキの首を押さえると、その尾羽を上げ下げしながら小走りで何かを探しているセキレイを避けるように、ぐるりと向こう側にまわって水を汲みました。小さな甕に汲んだ水を、アケビの蔦で編んだ籠に納められた大甕まで何度か運び、半分を過ぎるほど注ぎ入れると甕の口に蓋をしました。坂道を駆け上がり、アケビの籠につながる長い蔦の端が結わえられた大きな輪の取っ手を掴んだセヲは、ゆっくりと右回りで円を描いて歩きます。大きな輪に蔦が巻き取られるに従って、籠に乗った大甕がずりずりと引き上げられ、やがてセヲの足もと近くまで運ばれてきました。

そうして自分の水場から汲み上げた水で、セヲは乾いた土を少しずつ緩めながら、ゆっくりゆっくり捏ねていきます。

「おまえが土を捏ねるのを見るのは久しぶりだわ。」

セヲの隣に腰を下ろしながら、母が声をかけました。

「何を作るの？」

「鹿です。」

「雨乞いの埴輪じゃないのね。」

「雨が降らなくとも、溜め池がありますから。」

「じゃあ、何のために作るの？」

「別に。作りたいから。」

しばらくの間、セヲの母は黙って土を捏ねる息子の手もとを見ていました。そして、セヲが取



り分けた余りの土塊（つちくれ）を手にとると、細い指で何かを形作り始めました。

「母さん。」

セヲが手を休める事なく口を開きました。

「なに？」

母も手を動かしながら、優しく答えます。

「いや、何でもありません。」

そう言うと再び黙って土を捏ね続けるセヲに対して、母もまた何も尋ねません。やがてセヲが土を捏ね終わり、鹿の形取りを始める頃、小屋の近くで寝そべっていたアユキが急に立ち上がり、トツカの江に仕掛けた柴漬（ふしづけ）漁から戻ったセヲの父の姿を目指して駆けていきました。その姿を目で追いながら、母が穏やかにつぶやきました。

「私たちに気兼ねすることはありませんよ。私たちもそうでしたから。」

立ち上がり、夕餉の支度のために小屋のなかへと戻った母のあとには、小さな幼子の人形（ひとがた）が置かれていました。

## 静かな夕餉

---

十日目の朝の空は青く晴れ渡っていました。

そして、マヨサが改めて溜め池の堰を開く事を求めても、やはり父は首を縦には振りませんでした。土師部の長は、その日のうちに国造の姫のもとへ訴え出ようとしたが、マヨサはあと一日だけ待つよう強く願いました。

「待つて待てぬ事はないがな。」

二人の横に立ち、溜め池の水面をかすめて飛ぶセキレイを眺めていたセヲの父が、ゆっくりと口を挟みました。

「そなたの父上を知らぬわけではないから言うが、コワクビ殿を心変わりさせる事は容易ではないぞ。」

「俺に考えがあります。」

自信に満ちたマヨサの声に、セヲの父と土師部の長は顔を見合わせました。

「そなたがそこまで申すなら、明日の朝まで待とう。しかし、もうそれより先までは待てぬぞ。」

「わかりました。」

そう言うと、マヨサは二人を残して溜め池をあとにしました。

その日の夕方、セヲは十日前にこしらえて乾かしておいた、鹿と母が作った子供の人形を焼きました。野焼きの煙を嫌って、少し離れた小屋の陰に隠れていたアユキが、土師部の郷の方から帰って来たセヲの父の匂いに気づいて、尻尾を回しながら駆けていきます。

「うまく焼けそうか？」

「はい、風が乾いているお陰で、火の勢いが良いですから。」

「そうか。」

セヲの父はしばらく燃える炎を眺めていましたが、やがて黙って小屋のなかへと入っていきましました。

青白く暮れる西の空の下、一段目まで築き終えた国造の奥都城が、わずかに残る陽の光を浴びてその影を浮かび上がらせる頃、野焼きの火は鎮まりました。セヲが棒切れで積もった灰の山を軽くかき分けると、ちらほらとまたたく燃えさしの残り火に照らされて、焼き上がった鹿と子供の人形が赤黒く見えます。

「夕餉の仕度ができましたよ。」

そう呼ぶ母の声に、セヲは二つの埴輪を野焼きのあとに置いたままにして、小屋の中に入りました。

「では、いただきます。」

いつものように、両の掌を胸の前で結んだ父の言葉で始まったその日の夕餉は、いつもとは違ってとても静かでした。父が溜め池の話を持ち出さないのは、堰を開く目処が立っていないからだということは、セヲも母もわかっていましたし、ここで話したところでどうにかなるものでもないこともみな知っています。

夕餉が終わる頃、ついに父が口を開きました。

「大伴部の長の息子は、明日の朝までかけて父親を説き伏せるつもりじゃ。だが儂らはそれをあてにはしておらん。明日、土師部の長がマカタの館へ出向き、溜め池の堰を開くことを願い出る。午過ぎまでには堰は開かれるであろう。」

それを聞いたセヲも母も、黙ってうつむいたままです。戸が開け放たれた入口から静かに吹き込む夜風が、炉のなかで衰えた埋み火を再び赤くしましたが、またすぐに暗くなりました。小屋のなかには、外で鳴く夏の虫の声だけが響いています。

やがて、セヲの父が床に置いた碗をとり、わずかに残って冷めた白湯を飲み干すと、それをきっかけに母は彼が使った器を小屋の隅へと集め始めました。セヲは自分の器を運び終わると、そのまま寝床に入って横になり、静かに目を閉じました。

## 遂げられた思い

---

それからしばらくの間、セヲは目を閉じたままで父と母の様子をうかがっていました。やがて二人が床（とこ）に着き、寝息を立て始めたのを聞くと、セヲはそっと起き上がりました。そして二人を起こさぬように、ゆっくりとした動きで寝床を離れると、開けたままになっていた戸から外へと出ました。

月明かりの下、小屋から少し離れたところで体を伸ばして寝ていたアユキが、セヲに気づいて顔だけあげてこちらを見えています。セヲは、アユキのそばに歩み寄ると、その頭をそっと撫でました。

「おとなしく着いてこられるかい。」

そう言ってセヲは立ちあがると、昨日のうちに作っておいた松明を手にとり、野焼きのあとに残っていた小さな火をそれに移すと、静かに歩き出しました。

足もとを照らしなが坂道を下り、自分の水場のわきを通り過ぎ、トツカの江の渡し場までやってきました。昨日の昼のあいだに向こう岸からこちらへ移しておいた、いつもは使うことのない小舟に乗ってトツカの江を渡り、国造の奥都城が築かれている高台の下の岸につけたセヲは、奥都城の石室を作るために舟で運ばれてきた石を引き上げるために作られた急な坂を、滑り落ちないように足を踏みしめて上っていきます。

一段目まで出来上がっている奥都城のところまで来ると、そこからは小走り気味になりながら、歩き慣れた道を溜め池へと向かいました。林から聞こえる狸の足音を追いたがるアユキを何度もなだめながら、なだらかな坂道を駆け下りるセヲに驚いたアオバズクが、

ホッホロー

ホッホロー

という鳴き声を残して飛んでいきました。

こうして坂を下り終えたセヲの前に、黒く光るさざ波に丸い月影を浮かべた溜め池の眺めが広がりました。セヲはその水際（みずきわ）まで近づくと、松明の明かりが水面に写す自分の影をしばらく見つめていましたが、やがて顔を上げると池の向こう側にある堰へとまた歩き始めました。

きれいに刈り払われた葦のあとに低く茂る緑の羊歯を踏み分けながら、池の縁（へり）をぐるりと回って堰の手前に植え込まれた榊の垣根までやって来たセヲは、垣根の隙間から聞こえる水のさざめき流れる音に足を止めました。それまでセヲの後ろをおとなしく歩かされていたアユキが、嬉しそうに尻尾を大きく回しながら、榊の隙間をすり抜けて駆けていくと、垣根の向こうから聞き覚えのある声が水の音に紛れて聞こえてきました。

「やあ、アユキ。こんな夜中にどうした。」

それはマヨサの声でした。

セヲは、垣根の端に作られた狭い戸口を抜けると、開かれた堰のそばに立つマヨサの影に向かって大きな声で問いかけました。

「何で君が？」

松明を掲げて近づくセヲの姿をみとめたマヨサは、ほんの少しのあいだ黙ったあとで答えました。

「ここは俺の水場だからさ。」

瞬きするほどのほんの束の間、セヲの心に二人が初めて出会った朝の幻が浮かび、そして消えました。

一年前の夏の初めの朝に、セヲの水場に迷い込んだマヨサ。

堂々としながらも、飲めない水を飲んでしまった、と慌てるマヨサ。

しかし、いまセヲの目の前で松明の火に揺れるマヨサの顔には、少しの迷いの色もありません。

「俺は大伴部の長の息子だ。オオクニヌシと素舞をとったのも俺だ。だから、この堰を開けるのは俺の役目なのだ。」

「でも」

「土師部の長殿の願いにより堰が開かれたとしても、吾が大伴部はその務めを果たせなかったことを咎められるだろう。どうせ咎めを受けるのであれば、為すべきことを為したうえで受けたい。」

そう話すマヨサのすぐそばにしっかりと寄り添い、松明の火に映えて黒光りしているマカミの姿も、まるで主人に従い命を捨てることを心に決めているかのようです。

「わかった。」

セヲは静かに息を吸い込むと、改めてマヨサの瞳を見つめて言いました。

「いま、君はなすべきことをし終えたんだね。」

「ああ、俺の務めを果たしたのだ。」

「そう、君は務めを果たした。だから、この堰を開いたのは僕だということにすればいいよ。」

「何を言い出すんだ、セヲ。」

セヲは驚くマヨサの瞳を見返すと、なだめるような声で言いました。

「僕はどこの郷の者でもないんだ。だから、大伴部も土師部も、どこの郷の者も咎めを受けることはないさ。」

「おまえの父御殿や母御殿に累が及ぶぞ。そうなれば、今は縁を断っているとはいえ父御殿は土師部と、母御殿は服部とのつながりをたどられないとも限らぬ。」

「それは平気さ、僕は父さんと母さんから生まれた子じゃないから。赤ん坊の時に拾われたんだ。トッカの江を北から泳いで来た鹿が背負っていた籠の中にいたのを、母さんが見つけてくれた。きっと僕は、ヤマトタケルの命が降りられるよりもずっと前、オオクニヌシの命がこのハブに降りられたときにカトリの海の彼方へと追われた民の子なのだと思う。」

「その鹿がカトリの海を渡ってきたというのか。」

「君は信じないだろうな。」

「だれも信じないさ。」

「でも、僕が父さんと母さんの子ではないことは、すぐに信じられるだろう？ だから僕が堰を開いて困るハブの民はいない。」

めずらしく言葉で相手を負かそうとするセヲの肩を軽く叩いたマヨサは、その手を乗せたまま言いました。

「そんなことはない。」

しかし、セヲはなおも話し続けます。

「父さんと母さんのことなら気にかけてもらうことはないさ。掟を破ることにかけては、父さんや母さんのほうが僕よりも上手なんだからね。」

「俺が困るのだ。俺は嘘をつきたくない。」

「嘘も時と場合によるだろう。政とはそういうものなんじゃないのかい。」

「だから俺は政など好かぬのだ。たとえこの首を刎ねられることになったとしても、俺はこの堰を開いた手柄をおまえに譲るつもりはない。」

マヨサはそう戯れ言めかしながら、セヲの肩に乗せた掌に力を込めました。そして、その掌をそっと外しながら溜め池のほうを向くと、水面に浮かぶ月影を眺めながら言いました。

「別に、首を刎ねられると決まったわけではない。何年かの間、土牢にでも閉じ込められて仕舞い、ということになるかもしれぬ。」

「それでも、マヨサがいなくなることには変わりがないじゃないか。」

「それこそ誰も困らぬだろう。大伴部にはお館様もいれば、叔父のソワヒコもいる。」

「いや、奥都城造りが進まなくなる。大伴部と土師部の者があれほど息を合わせて事を進められるのは、君の指図の仕方が上手いからだと言っているよ。」

「それはうれしいな。だが、土師部の長殿がおいでだから、きっと滞ることはないさ。」

「でも」

そのとき何かが池のなかで跳ねました。その音に、それまで賑やかに鳴き交わしていた蛙たちの声が一斉にやみ、あたりには池から流れる水の音だけが残りました。

「とにかくだ。この堰を開いたのは俺だ。おまえじゃない。」

静けさのなかで、強く、念を押すように言うマヨサの言葉に、セヲもついに言葉を継ぐことを諦めました。マヨサはゆっくりとセヲのほうに向き直ると、いつものように笑ってつぶやきました。

「おまえと会えてよかった。」

その声は、再び鳴き始めた蛙の鳴き声に紛れて、夜の闇へと消えていきました。

## 新しい朝

---

セヲが自分の小屋に戻る頃にはもう、松明の灯がいらぬほどになっていました。トツカの江の渡しからの坂を上り終えたセヲは、薄紫に明け白む空の下で、昨日の野焼きの場所に並んでしゃがみ込む父と母を見ました。二人を振り向くような姿でたたずむ鹿と、そのかたわらに寄り添う幼い子供の埴輪を、じっと黙って見つめています。

やがて、セヲの母がそっと手を伸ばして自分で形作った幼子（おさなご）の埴輪を取ると、まわりについた灰を細い指で払い落としました。その光景はまるで、自分が憶えているはずのない、でも不思議と心のどこかに残っている、はじめて父と母に出会った時のもののようです。大きく違うのは父と母がとても寂しそうなことでした。

しばらくのあいだ、セヲはその様子を遠くから眺めていましたが、道草を食いながらあとをついて来たアユキに追い越されると、父と母の方へ向かってゆっくりと歩き始めました。

「ただいま。」

セヲの声に、父と母は揃って顔を上げました。

「おかえり。」

母が答えました。

父は黙ったままで、セヲの顔を見つめています。

「マヨサに先を越されました。」

セヲの言葉を聞いた父と母の顔に、昇る朝の陽射しが差し込みました。

「お腹が空いたでしょう。いま、朝餉の支度をしますからね。」

母はそう言うと、手にした埴輪をセヲの父に預け、餌をねだるアユキをあしらいながら小屋に入っていました。

その場に残った父は、朝日に輝く西の丘の大きな土舞台を眺めながら言いました。

「奥都城造りは今までのようには進まなくなりそうじゃな。」

セヲも、今しがた渡って来たトツカの江の向こうを眺めました。

しばらく二人は黙っていましたが、やがて再び父が口を開きました。

「あの奥都城が出来上がれば、カトリの海の向こうからも望めるであろうな。」



「さあ、どうでしょうか。」

「頂きに火を焚けば北のツクバの国やナカの国からでも、いや、もっと遥か彼方からでも見える。儂はそう思うておる。」

セヲは、去年の夏の終わりにマヨサと登ったアヅマ山から眺めた、カトリの海の向こうの郷から立ち上る幾筋かの細い煙を思い出しました。

「セヲ」

「はい」

「奥都城が出来たなら、儂の見る幻をおまえの目で確かめて見るが良い。」

「父さんは自分で確かめないんですか。」

「さすがにこの歳になると、知らぬ土地へ渡るのはおっくうになる。」

セヲの父はそう言って笑うと、子供の埴輪を鹿の横に戻して、ゆっくり立ちあがりました。そして、セヲの背中をぽんと叩きながら、こう付け加えました。

「おまえがカトリの海の向こうから見たありさまを、帰って聞かせてくれればそれで良い。」

## 父の算段

---

「早まったことをしおって。」

コワクビは朝餉の碗を投げ出すように膳の上に置くと、奥の間の入口に畏まるマヨサを睨みつけました。

「あれほど待てと申したであろうが。」

「しかし、日焼けしていく陸稲は待ってはくれませぬ。」

「それを待たせるのが政というものだ。」

組んでいた胡座を解いて左の膝を立て、マヨサの他には何も目に入っていないかのように前のめりになるコワクビの姿に、それまで傍らで夫と息子のやり取りを怯えるように見ていたマヨサの母は、コワクビの膳をそっと脇へ取り除けました。そして飛び散った汁をきれいに拭いたうえで、揃え直した膳をコワクビの前に戻しました。目の前に立ち上る湯気と味噌の香りに、コワクビは少し落ち着きを取り戻すと、あらためて胡座を組み直して言いました。

「まあ、開けてしまったものは仕方がない。急ぎ、ハブの郡にあまねく触れを出せ。大伴部のコワクビが溜め池の堰を切った、とな。」

マヨサは驚いたように父の顔を見ました。

「堰を開いたのは俺です。俺が勝手にやったことです。」

「おまえが吾の知らぬところで堰を開いたとなれば、おまえが咎めを受けるだけでなく、おまえに勝手をさせた吾までも咎められる。そうなれば、吾らハブの大伴部は立ちいかなくなるであろう。しかし、吾に命ぜられてのことであれば、咎めを受けるのは吾ひとりですむ。」

コワクビは、膳の上から箸を取り上げると一本を膳に戻し、手にした一本だけで芋を突き刺して口に運びました。

「でも、開けたのは俺です。逃げるような真似はしたくありません。」

「おまえが責めを負うてはならぬ。」

口のなかの芋を飲み込みながらコワクビが答えました。

「いつぞやも話したことだが、あと二十日もすればソワヒコがヤマトより戻る。ヤマトの大王より、おまえと大壬生部の姫とが縁を結ぶことのお許しを頂いてな。そうなれば、吾らにはもう何も畏れるものはない。もし吾が咎めを受けたとしても、おまえが手にする国造の力をもって吾

を許せば、全てはまるく納まるというわけだ。」

コワクビはそう言うと汁を一気にすすり、空になった碗をマヨサの母へと突き出しました。それを受け取ったマヨサの母は二杯目の汁をよそうと、コワクビの前の膳に揃えながら、そっと息子の方を見遣りました。胡座を組んだ膝の脇についた両手の拳が、父の掌の上から逃れられない口惜しさにふるえているように見えます。

「マヨサ、お館様は」

母が恐る恐る口を開いた時、戸の向こうから呼び鈴の鳴る音が聞こえました。

「どうした。」

コワクビが音のしたほうを向くと、わずかに開いた戸の隙き間から、扈從（こしょう）の顔がのぞきました。

「マカタの館よりお召でございます。」

「さすがに早耳だな。」

コワクビは立ちあがると、マヨサを見下ろして言いました。

「マヨサよ、今度こそ出過ぎたまねをするでないぞ。よいな。」

父が奥の間を出て行ったあとも、マヨサはそこに座ったままでいました。マヨサの母はコワクビが開け放したままにした戸を閉めると、大きくため息をつきました。そして、先ほど言いそびれた言葉を話そうとしましたが、父の座っていた場所を見つめ続ける息子の背中を見てやめました。

「まだ朝餉をとっていないのでしょうか。ここに運ばせましょうか。」

「いえ、お館様のお供をする支度をせねばなりませんから。」

「では、結び飯を作って部屋へ届けましょう。」

「母上。」

「はい。」

「俺は、父上の人柱ですね。」

母は黙ったままでマヨサの顔を見つめています。

「父上にとっては息子が俺でなくとも構わなかったのでしょうか。例えば、あの扈從でも。」  
「そのようなことはありません。お館様は、おまえには政の才があると仰せでしたよ。」  
「ではなぜ、俺を埒（らち）の外に置いたまま、国造の姫との縁組みをヤマトの大王に願い出たりするのですか。」  
「おまえはそれを知って素直に従いましたか。」  
「なぜ従わねばならぬのです？」  
「それが、大伴部の長の息子と生まれた、おまえの務めでしょう。」  
「もともと政は大伴部の務めではない。父上と叔父上が望んでいるだけです。」

声を荒げるマヨサに、母は再び黙ってしまいました。その目には哀しげな色が浮かんでいます。マヨサは心と、彼がまだ幼かった頃にハブの地を訪れた見世物一座の裏手で見た、曲芸を仕込まれる子熊を檻のなかから見つめる親熊の姿を思い出しました。

そう、マヨサが人柱なら、彼の母もまた人柱なのです。

そのことに思い至れば、常々疎ましくさえ感じていた母の心も哀れと覚えます。しかしマヨサは、えも言われぬ鬱陶しさをぬぐい去ることができませんでした。彼はまだ、自らの身の上を母のように諦めてはいないのです。口を開けばなおも母を責め立ててしまいそんな気持ちを押しさえ込むように、マヨサは深く息を吸い込むと、胡座を解いて立ちあがり、背中の中で閉ざされた戸を開け放ちました。

「では、支度をして参ります。」

背中を向けたままそう言って息子が出て行くと、奥の間にひとり残されたマヨサの母は、乾いた風に戦（そよ）ぐ庭のタラヨウの葉を虚ろに眺めていました。

「ハブの大伴部のコワクビ。お召しにより、息子のマヨサを伴いまかり越しました。」

マカタの館の庭先に通されたコワクビとマヨサは、館の裏手に茂るイツコリの命の奥都城の森から響くカッコウの声を聞きながら、広間の国造の座に座るヒツキ姫に向かってひれ伏しました。このような所から姫を奉るのも今日で終わりだ、密かにそう思うコワクビは、いつにも増して深々とひれ伏しているように見えます。

「ハブの民の暮らしのためとはいえ、お伺いをたてることなく溜め池の堰を開きましたこと、全てはこのコワクビが責めを負うべきことと弁えております。」

コワクビは、ヒツキ姫が口を開く暇（いとま）を与えまいとするように、あらかじめ描いた自らの筋書きを語り始めました。

「先の国造である父君の奥都城も未だ出来上がらぬうちに、それとともに作ることをお許しいただいた溜め池の水を使わせて頂くことを願い出て、姫様のお心を煩わせることはこのコワクビにはあまりに畏れ多く、吾が胸ひとつにてマヨサめに命じましてございます。」

一息ついたコワクビは、顔を上げることなく姫の様子をうかがいましたが、こちらの申し立てること全てを聞こうとしているのか、姫からは言葉を発しようとする気配は感じられません。

己の立てた筋を通すべく、コワクビはまた口を開いて続けました。

「ついてはこのコワクビ、いかなるお咎めであろうと甘んじて受ける覚悟でおりますれば、どうかこの場にてお沙汰下されますようお願い申し上げます。」

努めて大げさにならぬよう、しかし形ばかりのこととも映らぬようにと、胸の奥から絞り出すコワクビの押し殺したような声は、隣で控えるマヨサには猿回しの口上のように聞こえていました。かつてマヨサの願いを聞き入れ、国造の奥都城とあわせて溜め池を作ることを許したヒツキ姫が、こんな猿芝居に付き合うとは思えません。しかしコワクビにしてみれば、この芝居を姫がどのように見ようとも、いずれ届くヤマトよりの報せが全ての筋立てを一つにまとめることになるのです。ますます体を低くして畏まって見せるコワクビに対して、果たしてヒツキ姫はどのように応ずるのか、マヨサはどこか人ごとのような思いで待ち構えました。

「ハブの大伴部のコワクビよ。そなたの申し立て、相（あい）判った。」

姫は思いのほか穏やかな声で呼びかけました。マヨサはそこに駆け引きの響きは感じません。それどころか、全ての筋立てを見通す者が話す、乾いた言葉のように聞こえました。やがて届く

ヤマトよりの報せのことを、姫もすでに知っているのかもしれませんが。そしてこれから大きく変わる身の上について、マヨサの母のように諦めているのかもしれませんが。

しかし、それはマヨサの思い違いであることがすぐにわかりました。

「そなた、いかなる責めをも負うと申したな。」

「左様に申しあげました。」

「では、その首を刎ねる。」

「畏まっております。ただ、ハブのよろずのことがらについて、このマヨサに引き継がせねばなりません。あいにく、吾が政を脇より支えております義弟ソワヒコがヤマトより戻っておりませぬゆえ、吾が自ら息子に引き継がねばなりません。ついでには、お仕置きまで十日、いや五日ほどで構いませぬゆえ……。」

ソワヒコからの報せが届くまでの時を稼ぐための言い訳を語る、コワクビの地を這うような声を真上から押さえ込むように、姫の声がマカタの館に響きました。

「それには及ばぬ。」

思わず顔を上げたコワクビとマヨサの目に、国造の座から二人を見下ろすヒツキ姫の勝ち誇ったような顔が映りました。

「それではハブの政が」

コワクビはなおも食い下がろうとしましたが、その言葉など聞こえぬ素振りで姫は側（そば）に控える者に目配（めくば）せをし、一片の木簡を受け取ると、とても通る声で読み上げました。

「アスカの宮にて三国（さんごく）の調（ちょう）の儀執り行われし折、蘇我の大臣討たれたり。大臣の館も討ち滅ぼされ、そこに秋より住まいしハブの大伴部のソワヒコも死にたり。」

夏の陽射しが照りつけるマカタの館の庭で、コワクビのからだは凍りつきました。館を覆う冷やかな静けさに、マヨサはカッコウの声が途絶えている事に気がつきました。

「今朝、ヤマトより吾が許にこのようなものが届いた。どうやら、そなたの義弟は死んだようだぞ。」

ひれ伏したコワクビの背中が、わなわたと震えています。

「さて、そなたの義弟がなぜヤマトで死んだのか。それを吾が知らぬとお思いか、コワクビ。」  
「わ・・・吾には何が何やら、さっぱり判りませぬ。」

コワクビはやっとの思いでしばくれました。

「なんと。ハブの大伴部の長ともあろうものが、身内の者が大それた謀（はかりごと）をなしていることを知らぬとは。」

ヒツキ姫は木簡を側の者の手に戻しながら、勝ちが見えた遊びを楽しむ子供のような表情で、庭先でひれ伏すコワクビの背中を見下ろして言いました。

「まあ良いでしょう。いずれにせよ、そなたの首は刎ねられるのですから。」

発する言葉を失った父に代わり、マヨサが口を開きました。

「溜め池の堰を開いたのは、俺が勝手にやったこと。首を刎ねるのであれば、お館様ではなくこの俺の首を刎ねられよ。」

姫の座る広間へとにじり寄る勢いで訴えるマヨサに、姫は相変わらずの落ち着いた口調で答えました。

「そなたの父を謀反の咎としないこと、吾の情けと心得なさい。」

「しかし」

姫に向かってなおも言葉を継ごうとするマヨサを押しとどめながら、コワクビはささやくような、うめくような声で言いました。

「吾らハブの大伴部は残していただけるということか。」

「そなたの息子マヨサが跡を継ぐ事を許しましょう。吾もハブが乱れることを望んではおらぬゆえ。ただし」

ヒツキ姫は言葉をとめると、マヨサの顔を見遣りました。

「マヨサよ。そなたはハブの大伴部の新たな長として、若い者どもを率いてツクシの国へと赴き、しばらくのあいだ防人（さきもり）としてムナカタの大社をお守りする役を務めよ。」

「ツクシの国？ それはどこですか。サキモリとは？」

「ここイニハの国より遙か西、ヤマトの国よりもさらに西にあって、外つ国との境をなす国がツクシ。その国の海辺にて、外つ国との戦（いくさ）に備える役目が防人です。」

姫の話を聞いたマヨサは、目の前が開けたような気がしました。

ヤマトの国よりも西の彼方にあるというツクシの国のことはピンときませんが、防人という役目はいかにも彼の思い描く大伴部の務めのように思われます。

脇でうなだれる父の死が定まったというのに、そのような気持ちになる自分にとまどいながらも、心の奥に灯った小さな明かりが二つの瞳を通して姫の前に洩れるのを抑えられません。

マヨサが次の言葉を探していると、コワクビが吐き捨てるように口を挟みました。

「防人は西の果ての者どもの務め。それをせよとは、体（てい）の良い流罪（ながすつみ）ではないか。」

「さすがにマヨサには何の咎め立てなしとはいかぬ。しかし、防人はおろそかにできぬ役目。外つ国と縁の深い蘇我の大臣が討たれた今、ツクシの国の者共だけでは足りぬと、ヤマトの大王よりのお達しなのです。」

国造の姫はそう言うと、あらためてマヨサのほうに顔を向けて続けました。

「そなたが戻るまでハブの郡は吾が預かります。よその郡の大伴部に委ねることはせぬ。このこと、吾が確かに請け合しましょう。」

「ツクシに生きてたどり着けるかどうかもわからぬのに、そのようなことを請け合われたところで何の頼りになろうか。」

コワクビはあからさまな疑いの声をあげました。しかしマヨサは、まるで誓いを立てあう友のような眼差しをヒツキ姫から感じて、素直に見つめ返しました。それも束の間、姫は改めて居ずまいを正してコワクビのほうに向き直ると、張りのある声でこう言い渡しました。

「ハブの大伴部のコワクビ。吾に諮ること無く溜め池の堰を開いた咎により、そのほうの首、今日の陽が没するとともに刎ねる。」

咎人を引っ立てようと近づく衛兵を遮って、コワクビは自ら立ちあがりました。

「父上、俺は」

コワクビの背中に向かって声をかけたマヨサでしたが、その両脇にだらりと垂れた腕の先の爪に、ひれ伏した地肌から思わず搔きとった乾いた土が挟まっているのを見ると、その先の言葉が出てきません。そんな息子を見下ろしたコワクビも、しばらく言葉を探した末にこう告げました。

「ツクシの国は遠い。必ず生きてハブに戻れよ。」



それが、マヨサの聞いた父の最後の言葉となりました。

## 別離

---

「お前にこれをやる。」

その声に、埴輪を焼く火を熾（おこ）していたセヲが顔を上げると、いつもならトツカの渡しのある西の方から現われてわざと驚かすように背中から声をかけて来るマヨサが、今日は西陽を顔に浴びて真向かいに立っています。

「今日は歩いて来たのかい。」

「ああ、ハブの景色をよく憶えておこうと思ってな。マカミも楽しそうだった。」

マヨサはそう答えながら、翼を大きくひろげた鳥を象（かたど）った埴輪をセヲに渡しました。

「これはあのときの驚だね。」

「ああ。素舞の会の前にお前の父御殿に言われて作った驚だ。お前のようにうまくは作れなかったが、これが一番気に入った出来になった。」

「そんなことはないさ、とても良くできているよ。そうだ、奥都城が出来上がったら頂（いただき）にかざろう。あそこからならハブの全てが見渡せるから。」

セヲの言葉に、マヨサはうれしそうに目を細めながら腰を下ろすと、野焼きの火が勢いを増していく様（さま）をしばらく眺めていました。

煙を嫌って少し離れた小屋の陰に隠れていたアユキが、マカミの匂いに気づいて駆け寄ってくると、マヨサはわれに帰ったような顔で立ち上がりました。

「今日は長居はできないんだ。悪いが、またいつかな。」

そう言うと、アユキに向かって鼻をひくひくさせながら静かに尻尾を降り始めたマカミの背中をポンと叩いて、歩き出すように促しました。

「マカミはどうするんだい。僕が預かろうか。」

「ありがとう。だが、マツ姫に預けることにした。」

「マツ姫に？ 僕のところならアユキも喜ぶのにな。」

二人が腰を上げてゆっくりと歩き始めたとき、小屋のなかからセヲの父が出て来て声をかけました。

「明日、発（た）つのか。」

「はい。カシマの宮へ詣でて、そこから船で発ちます。」

「残して行かれる母君はどうなさる？」

「マツ姫の庵に身を寄せ、姫が奉っておいでのおのの教えを学ぶことになりました。」

「マツ姫のところか。」

「はい。奥都城に葬ることを許されぬ父の首も、姫が庵の片隅に塚を作って祀って下さりました。母上も父上の側近くにいたいのだと思います。」

「それでマカミも？」

アユキにじゃれつかれているマカミの頭を撫でながら、セヲが残念そうに言いました。

「マカミなら何かの役に立つだろう。」

マヨサは笑って黒い僕（しもべ）の顔を見下ろしました。マカミも鼻面を持ち上げ、主人の目を見つめています。

「マツ姫の庵であれば、時おり儂の妻も出向いておるから気かけやすいのう。じゃが」

マヨサの父は、何かを案ずるような顔で空を見上げました。

「マツ姫は、アスカの宮で討たれた蘇我の大臣の身内であろう。いずれ、姫にも災いが及ぶのではなかろうか。」

「姫の父君は、此度の変では大臣を討つ側に組したとのこと。ですから憂いてはおりませぬ。」

「そうであったか。どこもややこしい話ばかりじゃのう。」

そう言うと、セヲの父は深くため息をつきました。

「では、俺は行きます。」

マヨサは再びマカミの背中を叩くと、もと来た東のほうへと歩き始めましたが、少し歩くと足を止めて振り返りました。そして、マカミのあとを追いたがるアユキの首を抑えるセヲに向かって呼びかけました。

「セヲ、たまには渡し舟も使ってくれよ。つなぎっぱなしでは朽ちるのも早い。」

「わかった。」

「頼んだぞ。」

「ああ」

「じゃあ、元気でな。」

「マヨサも元気で戻ってきてくれよ。」

「ああ」

そう言い交わし、互いに手を振りあうと、マヨサはまた歩き始めました。

その姿が林の小道へと隠れそうになった時、小屋から飛び出したセヲの母が大きな声で呼びかけながら、マヨサに向かって駆け寄っていきました。そして、薬草の入った包みを手渡すと、深々と頭を下げて見送りました。マヨサもそれに応えて頭を下げましたが、もうセヲたちのほうを振り返ることなく林の陰へと消えていきました。

## 送別の歌

---

次の日、マヨサはバブの大伴部の若者たちを引き連れて、遙か遠くのツクシの国へと旅立ちました。

「母君、もっと近くでお見送りなさればよろしいのに。」

広く晴れ渡った夏空の下、カトリの海を見渡すアツマの山の頂きに立つマヨサの母に、マツ姫が静かに声をかけました。

「マヨサが嫌がるでしょう。私は疎まれていますから。」

「そのようなことはありません。」

「いえ、疎まれても致し方ないのです。」

うつむいたまま寂しそうに答えるマヨサの母の顔を、夏草の上に伏せたマカミが覗き込むように見あげています。照りつける陽射しのなかで冷たく縮むマヨサの母の手に、マツ姫は一枚のタラヨウの葉をそっと置きました。

「これは？」

「マヨサ殿から母君への手紙です。」

その葉の裏には、尖った枝の先で削ったような文字が綴られています。

天地(あめつち)のいづれの神を祈らばか愛(うつく)し母にまた言問(ことと)はむ

マヨサの母はじっと息子からの手紙を見つめていました。

今朝から吹き始めた南からの湿った風に、こぼれ落ちそうになった息子の言葉を両の掌を合わせてしっかりと包むマヨサの母の脇で、それまで伏せていたマカミが風に向かって急に立ちあがると、いままで聞いたたことのないような大きな吠え声を立てました。

「ほら、マヨサ殿の舟が。」

顔を上げたマヨサの母がマツ姫の指し示すほうを眺めると、マカタの鳥居河岸(とりいがし)から漕ぎだした何艘かの舟が、空の光を映してきらきらと輝くイニハの浦の水面を滑っていくのが見えます。遙か遠くを雁字(がんじ)を描いて進む舟の上の顔を見分けることは出来ませんが、舳先に背を向け櫂を漕ぐ若者たちのなかで、堂々と胸を張って座る姿がマヨサであることはすぐにわかりました。

「ご無事で戻られますように。」

マツ姫はそう言うと、マヨサの姿を臉に焼き付けるようにして瞳を閉じ、掌を合わせました。

そしてその隣では、タラヨウの葉を胸に押しあてたマヨサの母が、舟影が西の岬の向こうに隠れてしまうまで、息子の姿をずっと見つめていました。

## 人待ちの郷

---

マヨサがツクシの国へ旅立ってから二度目の春がきました。

「マツ姫さまより、庭の梅の枝をいただいて参りました。」

セヲの母はうれしそうに二本の竹筒に水を汲むと、それぞれに白と紅の枝を一本ずつ挿して小屋の入口に飾りました。

小屋の近くで薪を割っていたセヲの父が、花に顔を近づけて梅の香りをかぎながら言いました。

「マツ姫さまの庵のあたりも、近頃はずいぶん華やいでおるな。」

「蘇我の方々が多く都から落ちてこられたおかげで、あのあたりはもう蘇我の郷。」

「住まう家から、装う服や飾りから、まるでアスカの都のようじゃ。」

「おや、私に黙っていつ都においでなされたのですか？」

「いや、それはない。ないが、きっとそうじゃろうと思ってな。」

そう言って二人は笑い合いました。

「でも、マツ姫さまは静かだった頃を懐かしんでおられるご様子。」

「あの頃はまだ、トツカの江の向こうにあのような大きなものを望む景色もなかった。」

セヲの父が眺める先には、ようやく出来上がった国造の奥都城が山のようにそびえ立ち、その頂に焚かれた大きな篝火から立ち上る白い煙が、西の空に向かって棚引いています。

「思いのほか月日がかかったのう。」

「マヨサ殿がおられれば、もっと早くに出来ていたのではありませんか。」

「そうかもしれぬ。大伴部と土師部の者どもを、あの者はうまくまとめておったからな。」

「どうしておられるでしょうかね、マヨサ殿は。」

「さて。便りのないのは良い報せと申すから、きっと健やかに防人の務めを果たしておるのじゃろう。」

しばらく黙って篝火の煙の流れていく先を見つめていた二人の足もとに、トツカの江からの坂を駆け上がってきたアユキがじゃれついてきました。

「こいつ、さっきから何度も渡し場との間を往ったり来たりしておる。」

「お前の主人は今日出かけたばかり。ほんの半月ほどのあいだも待てぬようでは、マカミに笑われますよ。」

「そういうお前も、仏にセヲの無事を祈って来たのであろう。」

二人は顔を見合わせると、梅が飾られた戸口をくぐり、小屋のなかへと入っていきました。



## 故郷へ

---

そのころ、セヲは土師部の長に伴われ、ツクバの国へと向かう船に乗っていました。だんだんと近づいて来るツクバの峰を仰ぎ、カトリの海に沿って立ち上る夕餉の支度の煙を眺めながら、セヲが尋ねました。

「ツクバへはよく出向かれるのですか。」

「いや、吾もひさしぶりのことだ。ここ何年かは、値の張るツクバ石を使うことがなかったからな。あの国造の奥都城の石室（いしむろ）も、昔からの蓄えのほかはすべてイニハの石で賄ったであろう。」

「そうでしたね。」

「しかし、都落ちして来たとはいえ、蘇我の者どもはさすがに富んでおる。それに住いの建て方にしても、吾らの知らぬ技を持っておる。」

「マヨサが憧れていた都とは、あのよう立派な館ばかりが建ち並んでいるのでしょうかね。」

「きっとそうなのであろう。土を焼いて屋根に葺く、あの瓦というものを造るための窯の工夫もなかなか優れたものだ。そういえば、おまえも奥都城造りの折りに土の塊を焼き固めて用いることを考えておったな。」

「僕も瓦を初めて見たとき、そのことを思い出しました。でも、瓦はただ焼き固めるだけじゃなく、色々な紋様で飾っていて美しい。あんな細工を焼き崩さずに仕上げるのはどうやるのでしょうか。」

「吾らも新たな技の工夫を重ねていかねば、いずれはあの者たちの使い走りとしてこの海を往き来するだけになるやもしれぬ。」

そう言ってカトリの海を見渡す土師部の長に向って、セヲは再び尋ねました。

「奥都城はツクバの国からでも望めると思いませんか。」

「さあ、どうだか。」

「あの頂の篝火はどんな遠くからでも見えるはず、そう父さんが言うのです。」

つぶやくようなセヲの言葉には応えず、しばらく黙っていた土師部の長でしたが、やにわに口を開くと逆にセヲに問いかけました。

「お前はハブを離れたいか。」

「別に、そういうわけではありません。」

「この海の向こうこそが、お前の故郷であると思っているのであろう。」

「長殿はどう思われますか。」

「そうかもしれぬし、そうでないかもしれぬ。イニハとシモツウナカミの境あたりには、おまえと似た顔かたちの者たちも暮らしておる。きっと、遙か古（いにしえ）の世に吾らに国を譲り、

この海を北へと渡った者たちの裔（すえ）の民であろう。」

「土師部に国を譲った者たち？」

「ああそうだ。そのむかし大壬生部や大伴部に国を譲った吾らであるが、その吾らよりも先にイニハの地に住んでいた者たちがある。吾らの父祖はその者たちを北へと追ったのだ。もしおまえがその者たちの血筋であるならば、イニハこそがおまえの故郷ということになる。」

土師部の長の言葉に、セヲはイニハのほうを振り返りました。ハブの奥都城の姿はもうだいぶ小さく見えます。その頂から西へと棚引くさまが青い空にかすんで見えていた白く太い煙も、いよいよ見えなくなりました。しかし、頂に灯された篝火は暮れなずむ空の下で明るさを増して、その在り処をはっきりと示しています。

「おのれの故郷を、祖父母の生まれた地に求めるもよし、おのれが生まれ育ったところとするもよし。色々なところを訪ね、おまえの手にもっとも馴染む土を探せばよかろう。」

土師部の長はそう言ってセヲの肩をポンと叩くと、舳先のほうへと移っていきました。

「僕にもっとも馴染む土・・・」

セヲは船の縁（へり）をつかんだ手の甲をしばらく見つめていましたが、やがて顔を上げると、淡い茜の空の下に低く連なる西の丘から、既に夕闇のなかに溶けてしまった東の森までを眺め渡しました。

遠くから聞こえて来た羽音に空を見上げると、北へと帰る雁のくさび形の列が、今日の湊までもうひと漕ぎだとばかりに高まる漕ぎ手たちのかけ声を、ゆうゆうと追いついていきます。

薄紫の空の彼方へ消えていく雁の群れを見送ったセヲが、あらためてハブの奥都城のほうを振り向くと、沈む夕陽を追いかけるように、カシマの宮のほうからイニハに向かって風のように漕ぎ進む一艘の舟影が目に入りました。セヲの船からはだいぶ離れたところに行くその舟は、舳先に掲げた松明の明かりをハブの奥都城の篝火と重ねるようにして行き先を定めて、段々と暗さを増すカトリの海を前へ前へと進んでいきます。

「少し右に逸れているぞ。疲れた者がいたら俺が代わろう。」

鱸（とも）に座った若者が、奥都城を背にして櫂を漕ぐ者たちに向って、舟の目指すべき先を明るく大きな声で教え、励ましています。

「ほら、一度手を止めて振り向いてみる。あれが、俺たちがいつも夢で見っていたハブの篝火だ。」

水面を渡る夕風に乗って届く懐かしい声が誰なのか、セヲにはすぐに判りました。

「お帰りい。僕もあそこへすぐに戻るからあ。」

セヲが思わず身乗り出して叫ぶと、向こうの舟の若者の影がこちらを振り返りながら立ちあがり、両腕を大きく振って応えました。

それはまるで、空高く舞う大鷲のようでした。

## 古代の刻印

---

私はこの物語の時代を、日本の社会の有り様が大きく変わりつつあった「大化の改新」前後に置きました。岩屋の実際の築造時期も7世紀前～中期と推定されていますが、細かなことは謎です。

謎だからこそ、空想が広がります。

そして空想は自由。

例えば、セヲが焼いたムササビや鹿の埴輪。ムササビや鹿を象（かたど）った埴輪は、この物語の時代より約1～2世紀前のものとされる埴生周辺の古墳から出土していますし、埴生の地より遙か西の出雲地方でも約1世紀前の平所遺跡埴輪窯から「見返り鹿」の埴輪が見つかります。百年後のセヲの心にも同じイメージが湧くことだってあるでしょう。

例えば、マツ姫の庵に咲いた水仙。水仙が日本にもたらされたのは平安末期以降とされていますが、もっと早い時期に渡っていたかも知れません。

例えば、大伴部の長の息子マヨサと彼が詠んだ歌。この物語より約百年あとの天平勝宝7年（755年）に、埴生郡から防人として筑紫国へ赴任した大伴部麻与佐が詠んだ歌が万葉集におさめられていますが、その1世紀前にも同じような別れがあったとしても不思議ではないはずです。

多くの謎を秘めた古代の刻印が散らばる千葉県印旛沼周辺。この地を歩くとき、あなたの心にはどんな空想の風が戦ぐでしょうか。

### 【古代の刻印】

#### 龍角寺岩屋古墳

千葉県印旛郡栄町龍角寺にある一辺78m、高さ13.2mの方墳。国の史跡「龍角寺古墳群・岩屋古墳」を構成。石室は古くから開口しており、出土品は見つかっていないとのこと。

#### 浅間山古墳

千葉県印旛郡栄町龍角寺にある墳長約78メートル、周溝を含めると全長約93メートルの前方後円墳。国の史跡「龍角寺古墳群・岩屋古墳」を構成。金銅製冠飾、銀製冠、金銅製の馬具や挂甲という古代の鎧が出土している。「せんげんやま」と読むが、物語の中ではアヅマ山と呼ぶ。

#### 埴生郡衙跡

千葉県印旛郡栄町龍角寺にある大畑遺跡がそれであるとされる。千葉県立房総のむらの西側にあるガソリンスタンドのあるあたり。

#### 龍角寺

千葉県印旛郡栄町龍角寺にある天台宗の寺院。竜女が現れ、金の薬師如来像を祀ったのが創建

とされる。出土する瓦から7世紀末には既に法起寺式配置の伽藍があったことが明らかになっている。関東地方では数少ない奈良時代の作（頭部のみ）の銅造薬師如来坐像は国の重要文化財。

## 麻賀多神社

千葉県成田市台方（奥津宮は千葉県成田市船形）にある延喜式内社。社伝では紀元1世紀頃、東征中の日本武尊がこの地を訪れたことを縁起としている。三世末頃に印旛国造・伊都許利命が現在の船形に社殿を造営し、7世紀初めに広鋤手黒彦命が船形から台方に遷座して大宮殿とし、船形を奥津宮としたとされる。奥津宮の境内には伊都許利命の墳墓と伝えられる古墳が、大宮には樹齢1,400年と推定される東日本一の大杉（御神木）がある。また、大宮の末社のひとつである天之日津久神社は、昭和初期に岡本天明という人物に日月神示を降ろした天之日月神を祀る社であると信ずる人々により、パワースポットとして崇敬されているようである。

なお、麻賀多神社からほぼ真西650kmには、島根県松江市馬潟町がある。見返り鹿の埴輪が出土した平所遺跡埴輪窯は、馬潟町の隣町である矢田町に所在する。

## ムササビの埴輪

6世紀中期のものと考えられている南羽鳥正福寺遺跡（千葉県成田市南羽鳥）から出土。ほかにもボラと思われる魚や水鳥、鶏、馬などの埴輪も見つかっている。これらの埴輪は、成田市下総歴史民俗資料館に実物が展示されている。

## 埴生の篝火

<http://p.booklog.jp/book/25449>

著者 : sokuratesu

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/sokuratesu/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25449>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25449>